

望月町文化財調査報告書 第18集

上吹上遺跡

——緊急発掘調査報告書——

1990. 3

望月町教育委員会

序

ここに、昭和63年度望月町農村基盤総合整備事業に基づき、昭和63年度上吹上遺跡緊急発掘調査事業（現場調査と一部整理）及び平成元年度整理・報告書刊行事業が終了し、発掘調査報告書が「望月町文化財調査報告書 第18集」として刊行される運びとなりました。

望月町の発掘調査に係る一連の開発事業は、昭和60年度には県営圃場整備事業が、また、本年度は農村基盤総合整備事業がほぼ終了し、水田改良に伴う緊急発掘調査は上吹上遺跡が最後とみられます。また、道路の改良や増設は、国道142号線バイパス建設工事が行なわれ、昭和53年度から昭和57年度までの間に緊急発掘調査が実施されました。さらに、県道関連では平成元年度に発掘調査が実施され、平成2年度にも引続き予定されています。その他発掘調査に関連するものとしては、個人住宅に係る調査が過去2件、平成2年度に1件予定されています。このようなかつての状況をみますと開発事業に伴う緊急発掘調査26件、個人住宅に伴う緊急発掘調査2件、学術発掘調査1件、遺跡詳細分布調査1件、試掘調査2件が実施されたこととなります。

これらの調査の成果は、望月町や周辺地域をも含んだ地域の歴史（地域史）の解明に多大なる貢献をしてきたということに止まらず、極めて学問的に、しかも全国的視野に立った重要な成果と課題を投げかけたことも事実であります。上吹上遺跡緊急発掘調査の成果も、このような立場に立って貴重な資料を提示しているものといえます。

近年、急激な開発の波の中で失われていく文化財は増大する一方ですが、歴史を築き上げてきた先人の足跡を守り、永く後世に伝えていくことは、私たちにとっても、また、現代社会にとっても重要な使命であると思います。動きの激しい社会の中にあっては、最下限記録として保存し、それらを活用することによって現代社会に役立てていかなければならないと痛感している次第です。

本発掘調査及び整理・報告書刊行に際しましては、顧問の森嶋 稔先生をはじめとして調査員、調査補助員、作業員の皆様には熱意あふれるご指導・ご協力をいただきました。また、大谷地・吹上地籍の方々には、水道やその他必要物品の借用など快く提供をしてくださり、惜まぬご協力をいただきました。それぞれの方々に対しまして、衷心より敬意と感謝の意を表する次第です。

本調査の成果が記録保存の役目を担って多くの方々に利用され、郷土を再認識し、益々の歴史研究と地域社会発展の足掛りともなれば幸いと存じます。

1990年3月20日

望月町教育委員会

教育長 田中 稔

例 言

調査及び報告書作成業務

1. 本報告書は、昭和63年5月9日～7月13日まで現地発掘調査を実施した上吹上遺跡緊急発掘調査の報告書である。
2. 本調査は、望月町農村基盤総合整備事業に先立って望月町直営で実施し、教育委員会と教育委員会が組織した発掘調査団がその任に当たった。
3. 遺構の実測は、金井重恭・福島邦男が行ない、福島茂子・小野沢ちえ子・上野正子が行なう補助を行なった。
4. 遺構及び遺物の写真撮影は、福島邦男が行なった。
5. 遺物の洗浄は作業員が、また注記は補助員が行なった。
6. 遺物の復元は、倉見 渡・掛川喜四郎・金井重恭ほか多くの方が実施した。
7. 拓本は、掛川喜四郎・福島茂子が行なった。
8. 土器の実測は、委託契約により写真測図研究所が実施し、修正とトレースは福島邦男が実施した。石器や石製品は、実測・トレース共に臼田俊保が行なった。
9. 図・図版の作成は、福島邦男・福島茂子が行なった。
10. 本書の執筆は、序文は田中 稔、その他は福島邦男が行なった。
11. 発掘調査に係る書類・図面・写真・遺物等全ての資料は、望月町教育委員会が保管している。

本書の内容

1. 上吹上遺跡で検出した遺構は本文の通りであるが、調査面積が広範囲であったため、出土した遺物の量は比較的多く、また各期に渡っている。その中で、遺構は全て掲載したが、遺物については各時期の代表的なものを選択して掲載した。
2. 位置図に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の50,000分の1、分布図は、望月町発行の5,000分の1を使用した。

本文目次

序

例言

目次

第1章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の構成	4
第3節 調査団組織	4
第4節 調査の経過（調査日誌）	5
第II章 遺跡の立地と環境	7
第1節 遺跡の立地と自然環境	7
第2節 遺跡の歴史的環境	10
第III章 遺構と遺物	13
第1節 縄文時代の遺構と遺物	13
1. 第1号住居址 2. 第2号住居址 3. 第3号住居址 4. 第4号住居址	
5. 第5号住居址 6. 第6号住居址 7. 第7号住居址 8. ビット及び土壌	
9. 第1号集石 10. 第2号集石 11. 第3号集石 12. 第4号集石	
13. 第5号集石 14. 第6号集石 15. 第7号集石 16. 第8号集石	
17. 第9号集石 18. 第10号集石 19. 第11号集石	
第2節 遺構外出土遺物	47
1. 縄文時代の遺物 2. 古墳時代の遺物 3. 奈良・平安時代の遺物	
4. 中世・近世の遺物	
第IV章 総括	80
引用・参考文献	
図版	

挿図目次

第1図	上吹上遺跡位置図及び周辺遺跡分布図 1:100,000・1:10,000) ……	8	第18図	第5号住居址実測図(1:60) ……	27
第2図	上吹上遺跡グリッド配置図及び遺構全体 図(1:400) ……	11・12	第19図	第5号住居址出土土器実測図(1:3) ……………	28
第3図	第1号住居址実測図(1:60) ……	13	第20図	第6号・7号住居址実測図(1:60) 29	
第4図	第1号住居址出土土器実測図(1:8 1:6、他1:3) ……	14	第21図	第6号住居址出土土器実測図(1:2 1:6、他1:3) ……	30
第5図	第1号住居址出土土器実測図(16:47 1:6、他1:3) ……	15	第22図	第6号住居址出土土器実測図(1:2) ……………	31
第6図	第1号住居址出土土器実測図(48:1: 6、他1:3) ……	16	第23図	第7号住居址出土土器実測図(1:3) ……………	33
第7図	第1号住居址出土土器実測図(1:2) ……………	17	第24図	第7号住居址出土土器実測図(1:2) ……………	34
第8図	第1号住居址出土土器実測図(1:4) ……………	18	第25図	SK1~6土壇実測図(1:60) 35・36	
第9図	第2号住居址実測図(1:60) ……	19	第26図	SK60~71土壇実測図(1:60) 35・36	
第10図	第2号住居址出土土器実測図(1:3) ……………	20	第27図	SK72~74土壇実測図(1:60) 35・36	
第11図	第2号住居址出土土器実測図(1:2) ……………	21	第28図	SK75・76土壇実測図(1:60) 35・36	
第12図	第2号住居址出土土器実測図(1:4) ……………	22	第29図	SK77~94土壇実測図(1:60) 37・38	
第13図	第3号住居址実測図(1:60) ……	23	第30図	SK95~97土壇、集石13実測図(1:60) ……………	37・38
第14図	第3号住居址出土土器実測図(1:1: 6、2:1:3) ……	23	第31図	SK106~125土壇実測図(1:60) ……………	37・38
第15図	第3号住居址出土土器実測図(1:2) ……………	23	第32図	SK2土壇出土土器実測図(1:3) 39	
第16図	第4号住居址、7~105号土壇実測図 (1:60) ……	25・26	第33図	SK3土壇出土土器実測図(1:3) 39	
第17図	第4号住居址出土土器実測図(1:6) ……………	24	第34図	SK4土壇出土土器実測図(1:3) 39	
			第35図	SK6土壇出土土器実測図(1:3) 40	
			第36図	SK14土壇出土土器実測図(1:3) 40	
			第37図	SK17土壇出土土器実測図(1:3) 40	
			第38図	SK18土壇出土土器実測図(1:3) 40	
			第39図	SK26土壇出土土器実測図(1:3) 40	
			第40図	SK110土壇出土土器実測図(1:3) 40	
			第41図	SK115土壇出土土器実測図(1:3) 40	

第42图	SK117土壕出土石器实测图 (1:3)	41	第62图	遺構外出土石器实测图 (1:3)	57
第43图	SK120土壕出土石器实测图 (1:3)	41	第63图	遺構外出土石器实测图 (1:3)	58
第44图	第1号集石实测图 (1:60)	41	第64图	遺構外出土石器实测图 (1:3)	59
第45图	第2号集石实测图 (1:60)	41	第65图	遺構外出土石器实测图 (1:3)	60
第46图	第3号集石实测图 (1:60)	42	第66图	遺構外出土石器实测图 (1:3)	61
第47图	第4号集石实测图 (1:60)	42	第67图	遺構外出土石器实测图 (1:3)	62
第48图	第5号集石实测图 (1:60)	42	第68图	遺構外出土石器实测图 (1:3)	63
第49图	第6号集石实测图 (1:60)	43	第69图	遺構外出土石器实测图 (1:3)	64
第50图	第7号集石实测图 (1:60)	43	第70图	遺構外出土石器实测图 (1:3)	65
第51图	第8号集石实测图 (1:60)	44	第71图	遺構外出土石器实测图 (1:3)	66
第52图	第8号集石出土石器实测图 (1:3)	44	第72图	遺構外出土石器实测图 (1:3)	67
	44	第73图	遺構外出土石器实测图 (1:3)	68
第53图	第9号·10号集石实测图 (1:60)	44	第74图	遺構外出土石器实测图 (1:3)	69
第54图	第9号集石出土石器实测图 (1:3)	45	第75图	遺構外出土石器实测图 (1:2)	70
	45	第76图	遺構外出土石器实测图 (1:2)	71
第55图	第11号集石实测图 (1:60)	45	第77图	遺構外出土石器实测图 (1:4)	72
第56图	遺構外出土石器实测图 (1:3)	51	第78图	遺構外出土石器实测图 (1:4)	73
第57图	遺構外出土石器实测图 (1:3)	52	第79图	遺構外出土石器实测图 (1:2)	74
第58图	遺構外出土石器实测图 (1:3)	53	第80图	遺構外出土石器实测图 (1:3)	75
第59图	遺構外出土石器实测图 (1:3)	54	第81图	遺構外出土石器实测图 (1:2)	76
第60图	遺構外出土石器实测图 (1:3)	55	第82图	遺構外出土石器实测图 (1:4)	77
第61图	遺構外出土石器实测图 (12·13 1:6、 他 1:3)	56	第83图	遺構外出土遺物实测图 (1:3)	78

图版目次

- 图版 1 1. 第1地点全景 2. 第2地点全景
- 图版 2 1. 第3地点全景 2. 第1号住居址
- 图版 3 1. 第1号住居址炉址 2. 第1号住居址出土石器
- 图版 4 1. 第2号住居址 2. 第2号住居址炉址 3. 第2号住居址柱穴 4. 第2号住居址柱穴
5. 第2号住居址出土石器
- 图版 5 1. 第3号住居址 2. 第3号住居址出土石器 3. 第3号住居址炉址 4. 第3号住居址土
器出土状态 5. 第4号住居址
- 图版 6 1. 第4号住居址柱穴及び土壕

- 図版7 1. 第4号住居址出土土器 2. 第5号住居址出土土器 3. 第5号住居址 4. 第5号住居址土壌 5. 第5号住居址土壌 6. 第5号住居址土壌 7. 第5号住居址出土土器
- 図版8 1. 第6号住居址 2. 第6号住居址埋燵炉 3. 第6号住居址立石出土状態 4. 第6号住居址埋燵炉 5. 第6号住居址埋燵炉
- 図版9 1. 第7号住居址 2. 第7号住居址炉址 3. 第7号住居址出土土器
- 図版10 1. 土壌群
- 図版11 1. 集石群 2. 第1号集石 3. 第2号集石 4. 第3号集石 5. 第4号集石
- 図版12 1. 第5号集石 2. 第6号集石 3. 第7号集石 4. 第8号集石 5. 第9号(右)、第10号(左)集石 6. 第11号集石
- 図版13 1. 集石出土遺物 2. 集石出土遺物
- 図版14 1. 遺構外出土遺物
- 図版15 1. 遺構外出土遺物
- 図版16 1. 遺構外出土遺物
- 図版17 1. 遺構外出土遺物
- 図版18 1. 遺構外出土遺物
- 図版19 1. 遺構外出土遺物
- 図版20 1. 遺構外出土遺物
- 図版21 1. 遺構外出土遺物
- 図版22 1. 遺構外出土遺物
- 図版23 1. 遺構外出土遺物
- 図版24 1. 遺構外出土遺物
- 図版25 1. 遺構外出土遺物
- 図版26 1. 遺構外出土遺物
- 図版27 1. 遺構外出土遺物
- 図版28 1. 遺物出土状態
- 図版29 1. 調査前の様子 2. 金井神宮による神事 3. あいさつをする佐藤町長 4. 佐藤町長による献入れ 5. 基盤整備事業委員長(佐藤栄一氏)による献入れ 6. 田中教育長による献入れ
- 図版30 1. 調査及び整理風景

表 目 次

第1表 上吹上遺跡周辺の遺跡一覧表	9
第2表 土器分類表	48

第 I 章 発掘調査の経過

第 1 節 発掘調査の経過

望月町における発掘調査は、昭和51年度を最初として本年度まで、ほぼ継続して実施している。調査原因別にみると、県営農場整備事業によるもの12件、国道バイパス建設事業によるもの12件、個人住宅及び公共施設建設事業によるもの3件(平成2年度に1件予定)、学術調査によるもの1件、試掘調査2件、町農村基盤総合整備事業によるもの2件、そして遺跡詳細分布調査を加えると33件の発掘調査・試掘調査・分布調査が実施された。

上吹上遺跡の調査は、昭和63年度の望月町農村基盤総合整備事業に先立って実施したものであり、町の農政課との関連の中で教育委員会が主体になり発掘調査団を組織して、町直営で発掘調査を実施した。予算は、農村基盤総合整備事業における農家負担率が20%であるところから、発掘調査費総額のうち20%を文化財保護側の補助対象経費とし、20%のうちの50%が国庫補助額、15%が県費補助額、35%が町負担額である。総額から文化財保護側の20%を除いた80%は、事業主体である農政部局が負担をした。また、発掘調査の整備事業は、昭和63年度から平成元年度へと継続し、報告書刊行業務を行なった。予算構成は、昭和63年度と同様であり、望月町教育委員会が主体となり実施した。これらの経過は、以下による公文書のとおりである。

昭和62年度

- 9月10日 「昭和63年度文化財補助事業等事業計画の事情聴取について(通知)」62教文第258号
- 9月30日 「昭和63年度埋蔵文化財発掘調査現地協議」
- 10月5日 「昭和63年度文化財補助事業計画について(提出)」62望教第1367号
- 10月20日 昭和63年度文化財補助事業の事情聴取の実施
- 10月29日 「望月町上吹上(含中吹上)遺跡の保護について(回答)」62教文第7-110号
- 11月11日 「農村基盤総合整備事業に伴う望月町上吹上遺跡の保護について(提出)」62望教第1587号
- 12月3日 「昭和63年度文化財関係補助事業計画について(照会)」62教文第110号
- 12月17日 「昭和63年度文化財関係補助事業計画について(提出)」62望教第1733号
- 3月29日 「上吹上遺跡発掘調査作業参加者募集の有線放送について(伺)」
- 3月30日 「埋蔵文化財発掘調査の通知について(届)」63望教第400号

昭和63年度

- 4月1～3日 発掘調査作業参加者募集の有線放送の実施
- 4月6日 「昭和63年度上吹上遺跡発掘調査作業参加者募集の切の有線放送について(伺)」
- 4月7日 「昭和63年度上吹上遺跡緊急発掘調査の顧問、調査員の委嘱及び作業員の雇用について(伺)」

- 4月11日 「平石遺跡（整理）、上吹上遺跡緊急発掘調査及び整理作業参加者への参加通知（兼）事前会議について（伺）」
- 4月13日 「昭和63年度埋蔵文化財発掘調査及び出土品整理事業に係る労働保険について（伺）」
- 4月16日 「昭和63年度文化財関係国庫補助事業の内定について（通知）」63教文第49号
- 4月26日 昭和63年度上吹上遺跡事前会議及び学習会
- 5月6日 「昭和63年度埋蔵文化財緊急発掘調査における調査員（教育委員会委嘱）の非常勤特別職公務災害の加入について（伺）」
- 5月31日 「昭和63年度文化財保護事業県費補助金の内示について（通知）」63教文第1号
- 6月3日 「昭和64年度文化財補助金等の事業計画について（照会）」63教文第136号
- 6月13日 「昭和64年度文化財補助金等の事業計画について（回答）」63望教第851号
- 6月28日 「昭和63年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書について（提出）」63望教第597号
- 6月30日 「昭和64年度農村基盤総合整備事業等に係る埋蔵文化財について（通知）」63教文第185号
- 7月19日 「昭和64年度農村基盤総合整備事業等に係る埋蔵文化財について（提出）」63望教第1044号
- 7月31日 「昭和63年度文化財補助金の交付決定について（通知）」63教文第1号
- 8月25日 「昭和63年度文化財保護事業補助金の交付決定について（通知）」63教文第2号
- 8月30日 「昭和63年度国宝重要文化財等保存整備費補助金計画変更申請書について（提出）」63望教第597号
- 9月9日 「昭和64年度文化財補助事業等計画の事情聴取について（通知）」63教文第278号
- 9月12日 「昭和63年度文化財保護事業補助金計画変更承認申請書について（提出）」63望教第597号
- 9月28日 「昭和64年度文化財補助事業計画について（提出）」
- 10月1日 「長野県埋蔵文化財センター職員の派遣について（依頼）」63教文第1455号
- 11月21日 「昭和63年度文化財補助金の変更交付決定について（通知）」63教文第1号
- 12月8日 「昭和64年度文化財関係補助事業計画について（照会）」63教文第379号
- 12月19日 「昭和64年度文化財関係補助事業計画について（提出）」63教文第1721号
- 12月21日 「昭和63年度文化財保護事業補助金の交付決定について（通知）」63教文第2号
- 3月28日 「昭和63年度埋蔵文化財緊急発掘調査労働保険の確定保険料申告書の提出について（伺）」
- 3月28日 「埋蔵文化財の取得について（届）及び埋蔵文化財保管証の提出について（伺）」
- 3月31日 「昭和63年度文化財保護事業補助金の確定について（通知）」63教文第2-20
- 3月31日 「埋蔵文化財の取得について（届）」
- 3月31日 「埋蔵文化財の保管証（提出）」
- 3月31日 「労働災害保険確定保険料申告書（提出）」

平成元年度

- 4月1日 「平成元年度埋蔵文化財緊急発掘調査労働保険関係成立届の提出について（伺）」
- 4月3日 「平成元年度文化財保護事業県費補助金について（通知）」元教文第2号
- 4月8日 「埋蔵物の受領及び文化財認定について（通知）」63教文第1号
- 4月10日 「昭和63年度国宝重要文化財等保存整備費補助金の額の確定について」63教文第1-27号
- 4月10日 「消費税導入後の文化財保護事業の取扱について（通知）」元教文第781号
- 4月11日 「平成元年度埋蔵文化財緊急発掘調査事業計画について（伺）」
- 4月24日 平成元年度埋蔵文化財緊急発掘調査労働保険関係成立届の提出
- 4月28日 「平成元年度埋蔵文化財緊急発掘調査の作業参加者の雇用について（伺）」
- 4月28日 「平成元年度埋蔵文化財緊急発掘調査の雇用の通知と参加者全体の事前会議について（伺）」
- 5月8日 「平成元年度埋蔵文化財発掘調査における写真機材一式借上について（伺）」
- 5月23日 「平成元年度文化財関係補助事業計画の内定について（通知）」元教文第36号
- 5月30日 「平成元年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書について（提出）」元望教第781号
- 7月12日 「平成元年度上吹上遺跡報告書刊行事業に伴う出土遺物写真実測の委託見積について（伺）」
- 7月18日 「平成元年度文化財関係国庫補助金の交付決定について（通知）」元教文第1号
- 7月30日 「平成元年度上吹上遺跡報告書刊行事業に伴う出土遺物写真実測の委託契約について（伺）」
- 8月10日 「平成元年度農業基盤整備事業等にかかる埋蔵文化財の保護措置に係る委託契約について62教文第7-110号
- 8月10日 「平成元年度農業基盤整備事業にかかる埋蔵文化財の保護措置に係る委託契約について（通知）」63教文第7-110号
- 8月11日 「平成元年度上吹上遺跡報告書刊行事業に伴う出土遺物写真実測の委託契約締結について（伺）」
- 8月16日 平成元年度上吹上遺跡報告書刊行事業に伴う出土遺物写真実測の委託契約の締結
- 9月11日 「平成元年度文化財保護事業補助金の交付決定について（通知）」元教文第2号
- 9月13日 「平成元年度上吹上遺跡報告書刊行事業に伴う出土遺物写真実測の完了届」
- 1月20日 「平成元年度埋蔵文化財発掘調査事業上吹上遺跡緊急発掘調査報告書の印刷製本について（伺）」
- 1月31日 「平成元年度埋蔵文化財発掘調査事業上吹上遺跡緊急発掘調査報告書の印刷製本について（伺）」

- 2月2日 「平成元年度埋蔵文化財発掘調査事業上吹上遺跡緊急発掘調査報告書の印刷製本について(何)」
- 2月5日 「平成元年度埋蔵文化財発掘調査事業上吹上遺跡緊急発掘調査報告書の印刷製本について(何)」

第2節 発掘調査の構成

1. 遺跡名 上吹上遺跡
2. 所在地 長野県北佐久郡望月町大字協和字上吹上
3. 調査原因 望月町農村基盤総合整備事業の実施に伴い、上吹上遺跡に影響が及ぶため、事前に発掘調査を実施し記録保存を図る。
4. 調査主体者 望月町 町長 佐藤幸男
望月町教育委員会が組織する発掘調査団
5. 調査期間 (昭和63年度) 昭和63年5月9日～平成元年3月31日
(平成元年度) 平成元年5月15日～平成2年3月31日
6. 調査面積 6,100㎡以上
7. 調査方法 西→東を1・2・3……、北→南をA・B・C……とし、3m×3mのグリッド方式による平面発掘を実施。一部においてはトレンチ掘りも併用。

第3節 調査団組織

1. 顧問 森嶋 稔 (長野県考古学会長・千曲川水系古代文化研究所主幹・日本考古学協会
会員・長野県埋蔵文化財保護指導委員・昭和63年度上山田小学校教諭・平成元年度望月町誌編纂委員長)
2. 調査団長 田中 稔 (望月町教育委員会 教育長)
3. 調査担当者 福島邦男 (望月町教育委員会 学芸員・日本考古学協会会員・長野県考古学会員)
4. 調査員 渡辺重義 (軽井沢町文化財専門委員・長野県考古学会員)
倉見 渡 (長野県考古学会員・佐久考古学会員)
掛川喜四郎 (長野県考古学会員・佐久考古学会員)
古澤浩矢 (望月町文化財調査員)
金井重恭 (長野県考古学会員・佐久考古学会員)
臼田俊保 (長野県考古学会員・佐久考古学会員)
5. 調査補助員 福島茂子、小野澤ちえ子
6. 調査員 (昭和63年度) 上野知一、小野澤直次、淀川金一、上野清次、上野和子、佐

藤初子、阿部けさよ、小林光子、上野正子、市川みね子、小池嘉一、上野保の、上野 広、高塚照雄、菊地寅藏、伊藤今朝夫、小野澤甫、岩間つじい、高橋甫太、井出和幸、庄司 勝、木次昌子、小林文男、今井 大、田中信夫、大塚曜子、吉澤なつひ、塩沢光子、森屋よ志子、上野りつ、上野英子、大塚米子、土屋みくに、関 嘉津武、大森一尾、山本賢治

(平成元年度) 上野知一、小野澤直次、小池嘉一、上野清次、上野和子、吉村清明、市川 豊、上野恵美子、塩沢光子、上野りつ

7. 事務局 (教育長) 田中 稔、(昭和63年度 教育次長) 元矢 良、(平成元年度 教育次長) 羽田幹男、(社会教育係長) 大森睦男、(社会教育係) 川井節子、花岡一子、福島邦男

第4節 調査の経過 (調査日誌)

昭和63年度

5月9日 発掘調査の前に、重機による表土剥ぎを開始する。広大な面積であり、しかも三段の面になっているため、それぞれを分けて実施することにする。

5月10日 器材の搬入、テント張りを行ない午前10時より町長、教育長、教育次長、社会教育係長、農村基盤総合整備委員長、区長、地区委員長、調査団参加の元に結団式を挙げる。重機による表土剥ぎ、グリッドの設定を引き続き実施する。

5月11日～16日 調査区の東部地区(第3地点)を他地区に先かけて重機による表土剥ぎとグリッド掘りを行なう。縄文時代中期土器片、打製石斧、磨製石斧、石鏃、凹石、スクレイパー、フレイク等の遺物が出土する。尚、西部地区の表土剥ぎも引き続き行なう。

5月17日～24日 西部地区(第1地点)の遺構検出作業に加え、第3地点の遺構検出作業も実施する。第3地点では、地山の検出が難し

く、遺物は多数出土するものの遺構の検出が難しい。第1地点では、集石状遺構が7ヶ所検出される。

5月25日～27日 第1地点と第2地点の遺構検出作業を行なう。第1地点では、集石8基が検出され、清掃が終了した2基の写真撮影を行なう。第3地点では住居址が検出され第1号住居址とする。さらにピット群や土壇も見つかり掘り込みを行なう。

5月28日～6月6日 遺構の検出作業を進める。第1地点では、集石の清掃とピット、土壇の掘り込みを行なう。第3地点では、第1号住居址の清掃・写真撮影と測量のためのやり方を組む。土壇の掘り込みも行なう。

6月7日～11日 第1地点の南端に遺物集中区が見つかり、住居址の存在を想起させる。集石の清掃を行なう。第2地点はグリッド掘りを行なう。黒曜石フレイクが少量出土する。第3地点では、各遺構の実測と遺構全体測量

を行う。これにより第3地点は他地点に先がけて終了する。

6月13日～18日 第1地点では集石の清掃と実測、ビット、土壌の実測を行なう。第2地点では遺構の検出作業を行なう。第2地点に置いてあった廃土を、終了した第3地点へ移動する作業を行なう。

6月20日～30日 第1地点では、住居址が3棟検出され、すでに検出されている第4号住居址以外に第6・7号住居址の掘り込みを行なう。集石の断面実測のための掘り込みを実施する。第2地点では、ビットや土壌により住居址を確認し、掘り込みを実施する。第2地点からは石鏃、打製石斧、磨製石斧、石匙、スクレイパーなどが出土する。

7月1日～7日 第1地点は集石の半載作業。第6・7号住居址の掘り込みと清掃作業。6号住より埋燗炉2ヶが検出される。第2地点では遺構の検出作業を行なう。石匙、中期土器片、平安時代須恵器等が出土する。

7月8日～13日 第1地点では、集石の断面の写真撮影と実測、第6・7号住居址の写真撮影と実測。第2地点では遺構検出作業を進める。それぞれの作業を終了し、12・13日に遺構全体測量を実施し、現地調査を終了する。

7月14日 雨天時や7月初旬から一部の作業員によって遺物の洗浄が行なわれていたが、本日より本格的に整理作業に入った。

7月15日～3月31日 整理作業が継続して実施される。作業内容は、遺構図の整理、トレース、遺物の洗浄、注記、分類、石膏復元を行なう。石器の実測も手がける。土器・石器共小片でおびただしい量にのぼるため、基礎的な整理に比較的長期を要した。

平成元年度

5月15日 平成元年度の上吹上遺跡緊急発掘調査の整理及び報告所刊行業務が開始された。

昭和63年度にすでに実施経過している内容の点検と進め方の打ち合わせを行なう。遺構図の点検とトレース→図化、石器の実測・トレース→図化、土器の復元・実測→図化、遺物の写真撮影→図版化、原稿執筆を中心に進めることにする。

1月20日 それぞれの作業がほぼ終了し、印刷業者の選定に入る。

2月5日 印刷業者が決まり、契約を行なう。

2月5日～3月末日 印刷製本が開始される。

3月末日刊行

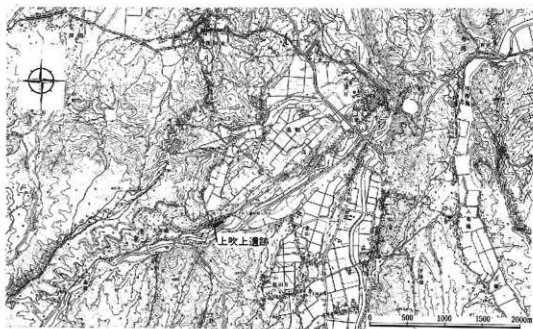
第II章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の立地と自然的環境

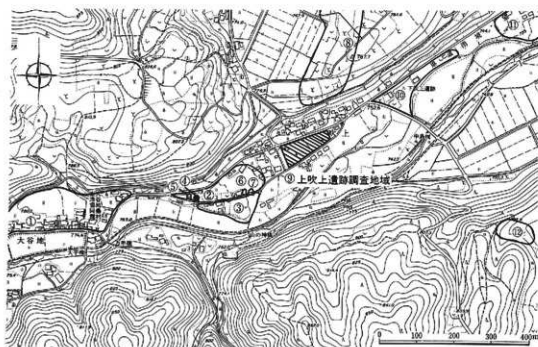
望月町は、北佐久郡の中でも千曲川の西方に位置し、北は北御牧村、西は立科町、東は浅科村、南は一部佐久市と茅野市に隣接している。西南方向には、山懐深い蓼科山(2,530m)を中心とする山系が連なり、北東方向には千曲川を隔てて聳え立つ浅間山(2,560m)の連山を臨むことができる。望月町の地質及び地形の形式は、大きく二つの要因に起因しているといえ、その一つは、蓼科山の火山活動により基盤並びに地形の形成がなされていることであり、もう一つは、御牧原台地や八重原台地が地殻の新層運動によって形成されていることである。望月町にかかる御牧原台地は、その南端において上部に「相浜層」(模式地：佐久市相浜)と呼ばれる非常にもろい湖沼性堆積層によって形成されており、各所に露頭箇所をみることができる。堆積物は、凝灰岩、泥岩、砂岩及び礫質砂岩などで、幾層にも互層しており、ほぼ水平に近い。これらの地層の中では、泥岩から針葉樹や広葉樹あるいは珪藻類の化石が産出し、比較的容易に採取することができる。また、相浜層の下部は「瓜生坂層」(模式地：望月町大字望月)と呼ばれ、メタセコイアやその他の植物化石が得られることから、相浜層が、新生代第四紀更新生の前期と推定されるのに対し、瓜生坂層は、新生代第三紀鮮新世の後期に層すると推定されており、今から200万年前に形成されたということがわかる。一見すれば蓼科山の裾野のように連なっているが、この瓜生坂地籍から御牧台地にかけては、形成過程にかなりの相違がみられるものである。

一方、蓼科火山によって形成された地籍は、立科町芦田付近、望月町の瓜生坂より北方と茂田井地籍を除く全地域、さらに浅科村の五郎兵衛新田付近にまで達しており、これらの地域をいわゆる蓼科火山地域と呼んでいる。中央に位置する蓼科火山群の南方には、八ヶ岳火山群が連なり、また、西方には霧ヶ峰火山群がその雄姿をとどめている。蓼科山は、全般に緩傾斜の裾野が北方の望月町方面へ延び、しかも雄大である。大河原峠付近にあっては、極めて急傾斜の谷を形成しているが、多くは蓼科山を中心に放射状に延びる緩やかな谷を形成している。これらの地域は、安山岩の分布が広く見られ、中でも両輝石安山岩、しそ輝石安山岩、角閃石安山岩が主体を成している。これらは、望月町の浅田切、八丁地、疊石、菅原、大谷地、吹上など八丁地川の中・上流地域に見ることができ、しかも熱の珪化作用による板状節理がもの見事に発達し、天然記念物のごとく美しい露頭を見ることができる。

望月町を流れる主流は、鹿曲川、細小路川、八丁地川、布施川の4河川であり、いずれも蓼科山を源流とし、長い裾野を抜って流下している。細小路川は春日で、また、八丁地川は望月で鹿曲川と合流し、北御牧村で千曲川に流れ込んでおり、布施川は、浅科村において千曲川と合流している。これら蓼科山と主流の4河川は、この地方においては人々の生活や動植物の生棲にとって必要不可欠な自然的条件であるとともに、これらの自然環境を取り入れながら過去から現在に



(1 : 100,000)



第1図 上吹上遺跡位置図及び周辺遺跡分布図 (1 : 10,000)

第1表 上吹上遺跡周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種類	現状	遺構・遺物	備考
①	平石遺跡	大字協和字平石	集落址	畑・水田 宅地	(縄・早～後)早期～後期の各期の遺物、(弥・中・後)土器、滑石製模造品、須恵器、(赤・平)土師器、須恵器、(中～近)小鉄、海磁器他	昭和62年度に発掘調査 昭和63年度に報告書発行
②	山ノ神A遺跡	大字協和字山ノ神河原 上吹上	散布地	水田 宅地	(縄・前・中・後)漆鉢、黒曜石フレイク、(古・後)須恵器、(平)土師器、須恵器	平成元年度に発掘調査
③	山ノ神B遺跡	大字協和字山ノ神河原	散布地	畑・宅地	(縄・中～後)土器、フレイク、(弥・後)土器、(平)土師器、須恵器	
④	山ノ神第1号古墳	大字協和字山ノ神河原	古墳	畑	(古)直刀14、刀子32、刀装具20、馬具4、鉄鏝53 勾玉7、管玉1、切子玉17、金環13、磁環1、金鈴 2、埴輪片4	昭和45年度に発掘調査 報告
⑤	山ノ神第2号古墳	大字協和字山ノ神河原	古墳	畑	(古)天杵石は存在しないが保存良好	
⑥	山ノ神第3号古墳	大字協和字山ノ神河原	古墳	宅地	(古)横穴式石室、直刀3、刀子10、鉄鏝50以上、 貫1、管1、香壺1、土金具2、雲母1、帯金具2、 瑪瑙製曲玉7、水晶製切子玉2、水晶製小玉2、 琥珀製丸小玉1、滑石製白玉1、ガラス小玉14、 金環2	平成元年度に発掘調査
⑦	山ノ神第4号古墳	大字協和字山ノ神河原	古墳	畑	(古)横穴式石室、刀子3、鉄鏝15、金環2、管 3、帯金具1	平成元年度に発掘調査
⑧	黄前反遺跡	食塩区 大字協和字太田 岡池	散布地	畑・水田	(縄・中)中期後半の住居址、漆鉢、打石弁・土 器・フレイク、(平)土師器、須恵器	
⑨	上吹上遺跡	大字協和字上吹上	集落址	水田	(縄・中～後)中期住居址7、集石11、土器、漆 鉢、洗鉢、運炭炉、打石弁、磨製弁、石鏝、田 石、磁石、石匙、フレイク他	昭和63年度に発掘調査
⑩	下吹上遺跡	大字協和字下吹上	集落址	畑・宅地	(縄前～中)前期住居址1、中期住居址5(内敷石 住1)、埋炭、漆鉢、洗鉢、打石弁、磨石弁、石 鏝、ノミ型土器、陶石、磁石、石匙等	昭和53年度に発掘調査 報告書
⑪	下吹上下遺跡	大字協和字下吹上	散布地	畑	(縄・中)中期土器、黒曜石フレイク、(平)須恵 器	
⑫	堂上日影A遺跡	大字協和字堂上日影	散布地	畑	(平)土師器、須恵器	

至るまで日々刻々と生活が営まれたのであり、基本的な生命泉であるといえる。

上吹上遺跡は、望月町の中心地より西方で八丁地川中流の左岸に当る河岸段丘に位置している。この付近は、平石遺跡緊急発掘調査報告書でも記載したが、八丁地川水系の狭長な河岸段丘が続く中にある比較的広い段丘面が形成されており、河床からの比高差は10m前後を測る。周囲の山地は、いわゆる蓼科火山によって形成された裾野であり、蓼科山から上吹上遺跡付近まで安山岩の板状節理(鉄平石)が脈々と続いている。ここは水には豊かな地域であり、八丁地川はもとより、対岸には水道にまで利用されている不動水が湧き出している。

上吹上遺跡の存在する地域は沖積地であり、八丁地川の流れの変更や、氾濫などによって河岸段丘が形成されており、その結果として、現状では最上部に水田耕作面である耕作土が乗り、その下部は厚い砂礫層が堆積していた。遺構の存在する箇所は、不思議なことに耕作土下部に黒色土が堆積し、これを掘り込んで構築されていた。恐らく人工的に石を抜き取り、客土も行なったのであろうと思われるが、部分的に堆積状態の変化が激しく、自然か人為的かの別までは把握することができなかった。

本地域は、蓼科火山による形成層とその後の八丁地川の影響とによって成り立っており、現在の生活もそれらの自然的環境をまさに踏襲しているのである。

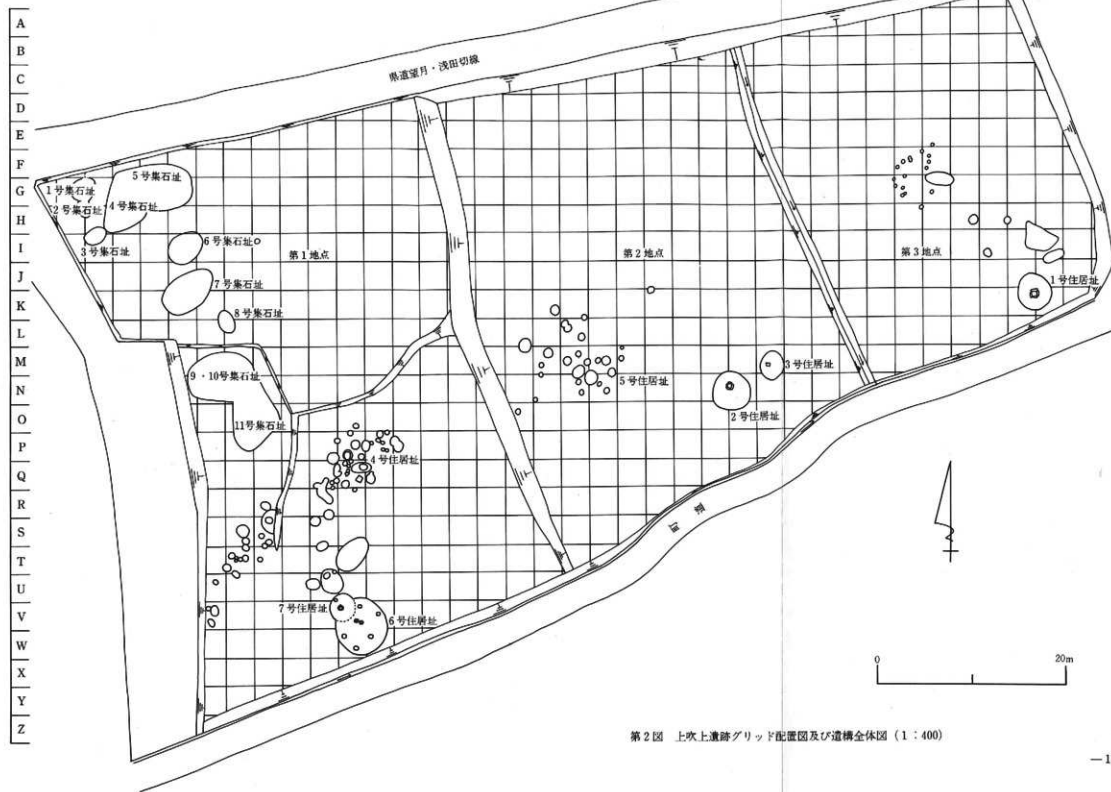
第2節 遺跡の歴史的環境

望月町に存在する遺跡は、地点からみると287遺跡であるが、それぞれを各時代別に区分してみると総数469遺跡を超えている。このうち最も多いのが平安時代で42.9%、次いで縄文時代の37.5%、次は古墳時代（古墳主体）の11.8%である。旧石器時代の遺跡は2例がかつて報告されているが、その実態は不明であり、弥生時代の遺跡は、発掘調査によって遺物が少量出土しているだけで、遺構（生活址）そのものは今だ発見されていない。

平安時代は、前代より続く望月牧の最も盛んになる時期であり、地域的な社会情勢に加え朝廷直轄地を控えていたこともあって、人口が急増したと思われ遺跡数が極立って多い。分布している地点も、望月町のほぼ全域にみられる。上吹上遺跡は縄文時代が主体の遺跡であるが、出土遺物の中には平安時代の須恵器や土師器の坏が出土したり、土師器の甕の完形品も出土している。縄文時代の遺跡も望月町全体からみると、ほぼ全域に分布しているといえ、特に蓼科山麓に近い程分布の密度が濃くなっている傾向にある。発掘調査の結果からみると、細小路川、鹿曲川の上流地域と八丁地川中流地域とに集中し、しかも早期から晩期初頭までくまなく各型式の土器を保有した人々が生活を営んでいるのである。上吹上遺跡の周辺では、昭和51年度に発掘調査した下吹上遺跡と昭和62年度・平成元年度に実施した平石遺跡、未調査ではあるが遺構が確認されている貴船反遺跡が代表的なものである。下吹上遺跡では住居址6棟、平石遺跡では49棟が検出されており、全容を調査すれば数百棟の住居址やその他の遺構が検出される筈である。

古墳の存在もこの付近にあっては多数構築されており、八丁地川水系は特にバラエティーに富んでいる。本水系や鹿曲川水系を臨むように山頂墳である内裏塚第1号、2号古墳（5世紀）や山ノ神第1号～4号古墳、真光寺第1号～4号古墳、尾崎第1号～5号古墳、大塚第1号～6号が分布しており、このうち山ノ神第1・3・4号、真光寺第1号、尾崎第1～3号古墳が発掘調査されている。特に山ノ神と真光寺古墳においては、構造もよく確認でき、また出土遺物も各種類とも極めて多量に出土しており、当地方の古代史解明の重要な手掛りとして重要である。

49 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37

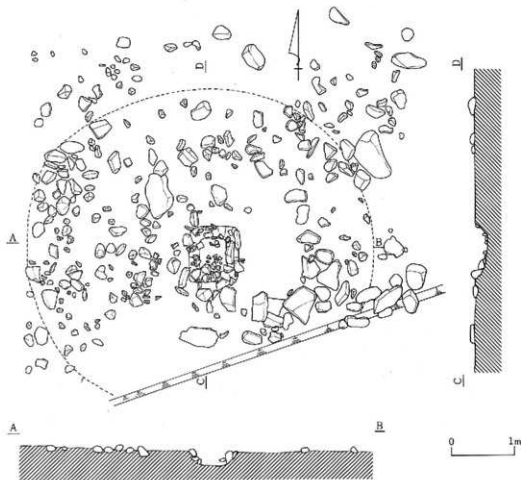


第三章 遺構と遺物

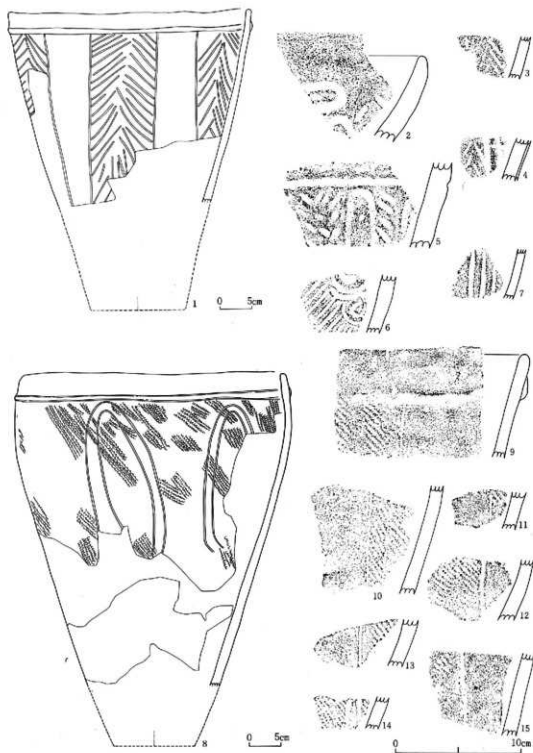
第1節 縄文時代の遺構と遺物

1. 第1号住居址 (第3~8図、図版2・3)

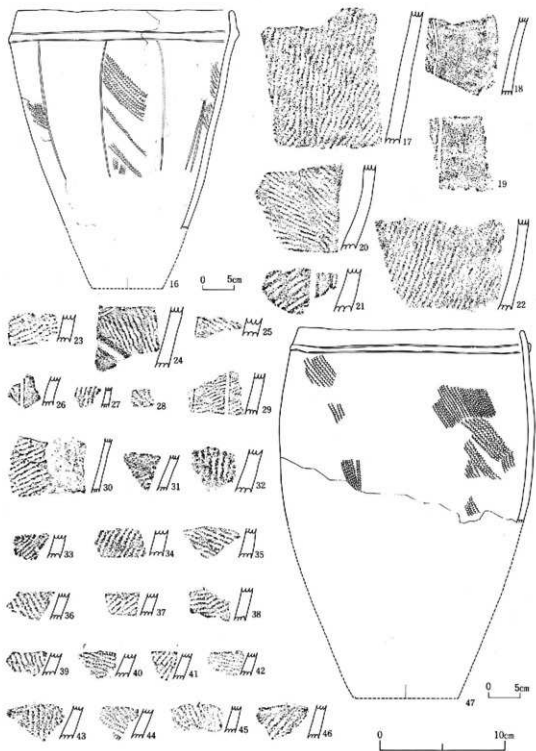
本住居址は、調査地区の第3地点で検出された縄文時代中期の住居址である。プランの南側は、町道と水路によって切られて存在しておらず、またその他の部分も壁等が存在せず、安山岩(鉄平石)と人頭大の礫によって円形に囲んでいる様相であった。現状で、東-西540cm、南-北540cm程であり、推定するとほぼ円形プランになるのではないかと考えられる。中央には、東-西80cm、南-北100cmの石囲炉が存在した。炉石は熱を受け欠損したり崩れたりしていた。内部より中期土器片が多量に出土している。床面は、小礫が敷かれ、部分的に鉄平石が残っていた。か



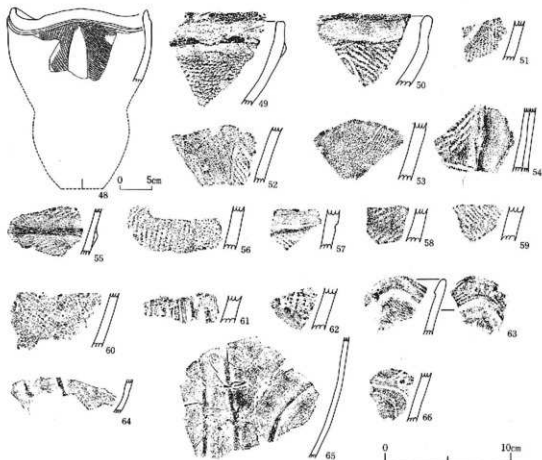
第3図 第1号住居址実測図 (1:60)



第4图 第1号住居址出土土器实测图 (1·8 1:6, 他1:3)



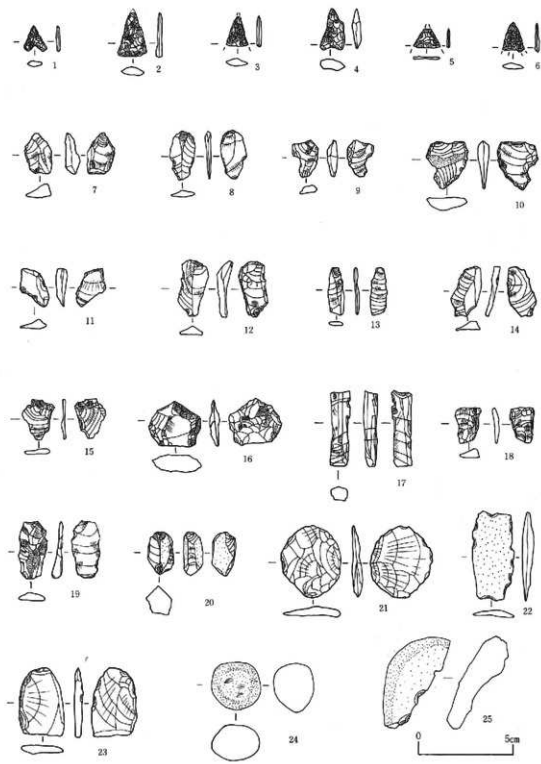
第5图 第1号住居址出土土器实测图 (16·47 1:6, 他1:3)



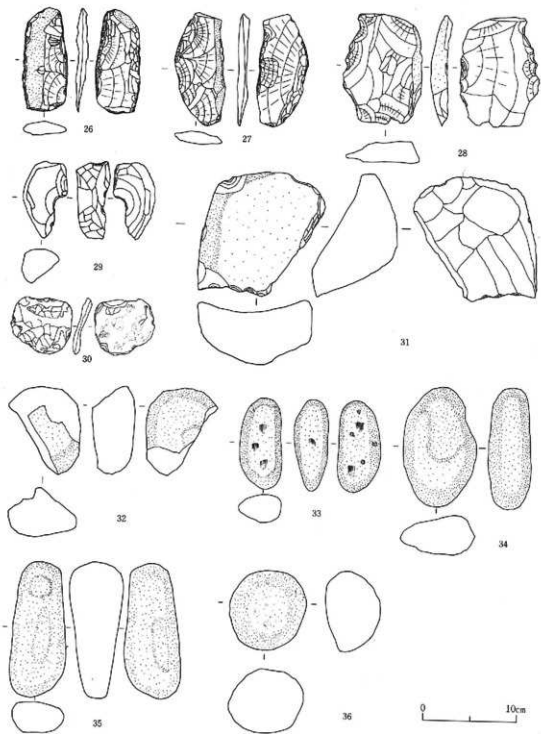
第6図 第1号住居址出土土器実測図(48 1:6, 他1:3)

つては全面に礫または鉄平石が敷かれていたと思われ、敷石住居址であった可能性が高い。また、プランの東南部には比較的大きな鉄平石が集中して存在しており、住居址に使用されていた敷石の一部と思われる。

遺物(第4~8図)は、土器、石器ともに良好な資料が出土しており、特に中期後半IV期の縄文系及び唐草文系が主体をなしている。第4図1~7は、唐草文系土器で、1は縦状沈線の区画の中に「八字状」の綾杉文が施文されており、しかも区画内に施文部と無文部を交互に置いている。沈線はかなり細くて弱々しく、鋭さに欠けている。口縁部直径40cmを測るが、胴部下半が欠損しており器高を知ることはできない。2~6は、沈線にバラエティーをもつが綾杉状の施文が基本となる土器である。9~46は縄文系の土器で、全般に黄褐色の比較的軽い胎土である。文様構成の基本は、楕円形を基調とした沈線文と縄文との組み合わせにより施文されている。16は、口縁部直径42cmで胴部下半が欠損している。口縁部直下には器面を一周する隆帯が貼り巡らされ



第7图 第1号住居址出土石器实例图(1:2)



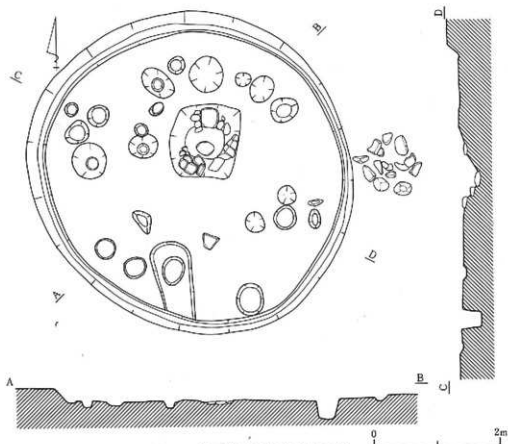
第8图 第1号住居址出土石器实测图(1:4)

ている。器面には全体に斜縄文が施文され、その上から縦状で二重に描かれる長楕円区画文が施文されている。沈線は細くて弱々しい。47は、口縁部直径34cmでやはり胴部下半が欠損している。16と同様口縁部直下には隆帯が貼り巡らされ器面を一周している。文様構成は、16とはやや異なり、区画された沈線の中に縄文が施文されており、しかも無文部と有文部を意識して施文している。第6図48～66は縄文系の土器で、器形や文様構成が極めて後期的である。48は口縁部直径21cmで4つの波状をもっている。この波状に沿うように隆帯が巡り、その下部から沈線による楕円区画文が施文されている。区画内は無文であり、他は全面に縄文が施文されている。49・50も同様の土器である。64～66は、地文は無文で、細い隆帯が貼付されている。

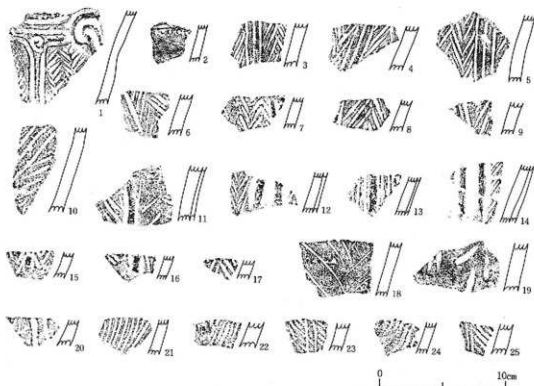
石器は、石鏃、掻器、削器、両面石器、横刃型石器、凹石、磨石が出土している。かなり破壊が進んだ住居址の中にあつては、各種類とも一定量の石器が出土したといえる。

本住居址は、出土遺物からみて縄文中期後半IV期の住居址であり、各方向の影響を受けてバラエティーはあるが、曾利V式期、加曾利EIV式期と併行関係をもっとみられる。

2. 第2号住居址 (第9～12図、図版4)



第9図 第2号住居址実測図 (1:60)



第10図 第2号住居址出土土器実測図(1:3)

本住居址は、調査区の第2地点で南側の町道に近接した所で検出された縄文時代中期末葉の住居址である。第3号住居址とも隣接している。住居址の存在する地点は、砂礫が厚く堆積し、さながら河原のような様相であり、地下水も高く常に水にひたっているという状態であった。住居址の構築面は、恐らく礫を取り除いたものと思われるが、地山に接する部分は小礫が突出し、整った環境とはいえない。

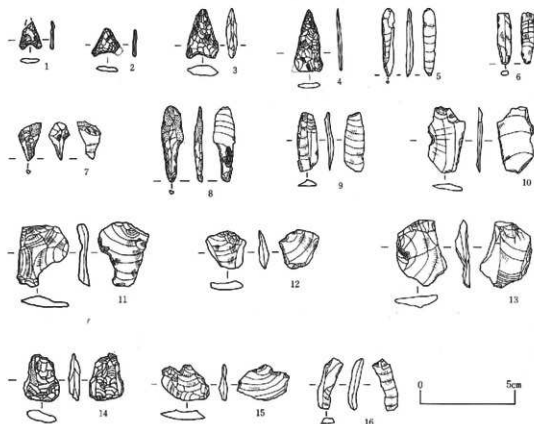
プランは、東-西520cm、南-北520cmを測るほぼ正円形の住居址で、壁高は5~25cmであり地山が北西から南東に対して傾斜していることもあって、北側程高く、南側に至っては僅かに残されているだけであった。しかし、残存する壁はかなり固く締っており良好な状態であった。壁面下には一周する周溝が存在していた。炉址は、プラン中央部よりやや北側に造られているが、炉石が抜き去られており、残る炉石も焼成され崩れた状態であったので、炉址そのものの構造や規模を把握することはできなかった。掘り方は東-西110cm、南-北120cmを測る比較的規模の大きな炉址であった。柱穴は、主柱穴が5個で他は取り替えや補助のためのものと考えられ、それぞれに沿った位置に存在していた。柱穴内部は、柱を入れた後に小礫を詰めて土で埋めた様子がよく残されていた。直径は20~50cmのものが存在していたが、25~30cm前後のものが多く、床面

は、地山をならし、タタキをなしたように極めて固く造られており、覆土が床面より剥がれる程はつきりしていた。プランの南側には、出入口部ではないかとみられる落ち込みが検出された。かなり浅い掘り方ではあるが、床もしっかりしており注目に値するものである。出入口部の検出された例は、この付近だと下吹上遺跡第2号住居址にみられ、本例とは逆に黄色ロームをスロープ状にして盛り上げたものである。

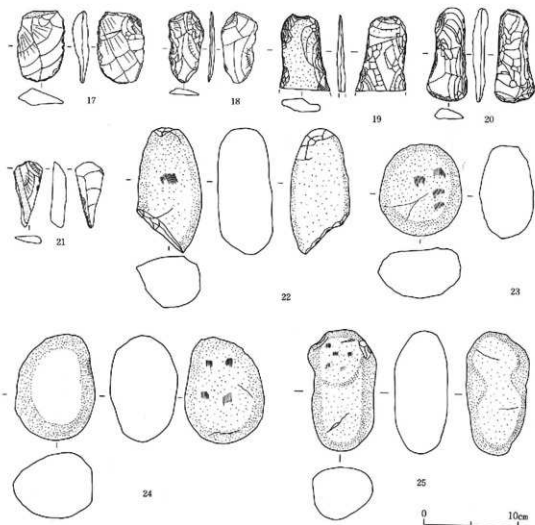
出土した遺物(第10~12図)は、縄文時代中期後半III期を主体とした土器が少量と僅かな石器がある。1~21は唐草文系の土器で曾利Ⅲ式~Ⅴ式土器が混在しており、1は渦巻状の貼付文と綾杉状文を囲む区画沈線文が施文されているものである。その他も綾杉状沈線文が基調であったり、19のように兩垂沈線のみみられるものも出土している。22~25は縄文系の土器である。

石器は、石鏃、石錐、削器、両極石器、打製石斧、磨石、敲石が出土している。中でも石鏃は大きさや形にバラエティーがみられる。また、単一住居址にしては石錐の出土量が多く、注目に値する。

本住居址は、出土した土器型式より縄文中期後半III期に比定することができる。



第11図 第2号住居址出土石器実測図(1:2)

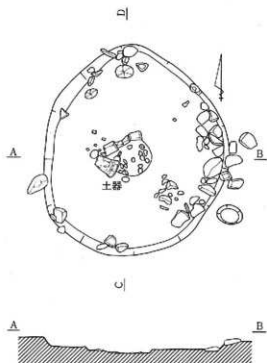


第12図 第2号住居址出土石器実測図(1:4)

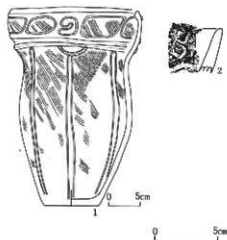
3. 第3号住居址(第13~15図、図版5)

本住居址は、調査区第2地点中央南側で町道に近接して検出された。本址の西側には第2号住居址が検出されている。第2号住居址の立地環境と同様、大小の礫が堆積する中で、これらの礫を取り除いた後に住居址を構築している。湧水は第2号住居址に比べればほとんどないと言ってよく、地山に湿気を帯びている程度であった。

プランは、東-西290cm、南-北340cm、壁高15~20cmを測り、南北に長い楕円形を程していた。中央には、70×80cmの方形に近い楕円形状の炉址が存在し、鉄平石を平状に置いて囲んでいたと考えられるが、北側から西側にかけて一部が残存しているのみであった。炉址は僅かに凹んでい



第13図 第3号住居址実測図 (1 : 60)



第14図 第3号住居址出土土器実測図

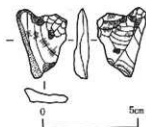
(1 1 : 6, 2 1 : 3)

るだけであり、底部には小礫が敷き詰めてあった。焼土や灰等は何も存在しなかった。床面は、炉址の周辺を中心にして比較的固く締っていたが、壁付近は、拳大の礫が存在していた。特に東側の壁際に集中していた。また、中には鉄平石も敷かれた状態が存在していた。本住居址は、もともと全面に石が敷かれていたのではないかと考えられる。炉址に存在する鉄平石は、炉石ではなく、床面に敷かれた

敷石であった可能性もある。

遺物(第14・15図)は、炉址の脇より出土した加曾利EⅢ式土器と数片の中期末の土器片、それに黒曜石製の石器だけであった。深鉢形土器は、口径20cm、器高32cmを測る。

本住居址は、床面より出土した深鉢形土器から縄文時代中期後半Ⅲ期に比定される。



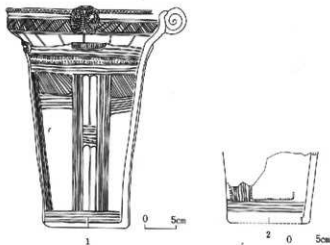
第15図 第3号住居址出土石器実測図 (1 : 2)

4. 第4号住居址 (第16・17図、図版6・7)

本住居址は、調査区第1地点の中央部よりやや南側によった所で検出された縄文時代中期前半の住居址である。本址の位置する地域は、周辺に大小の礫が厚く堆積しているのに対し、ここだけはほとんど礫が存在せず、黄色ロームと砂質土が同量混入した土壤であり、水はけもかなり良い。

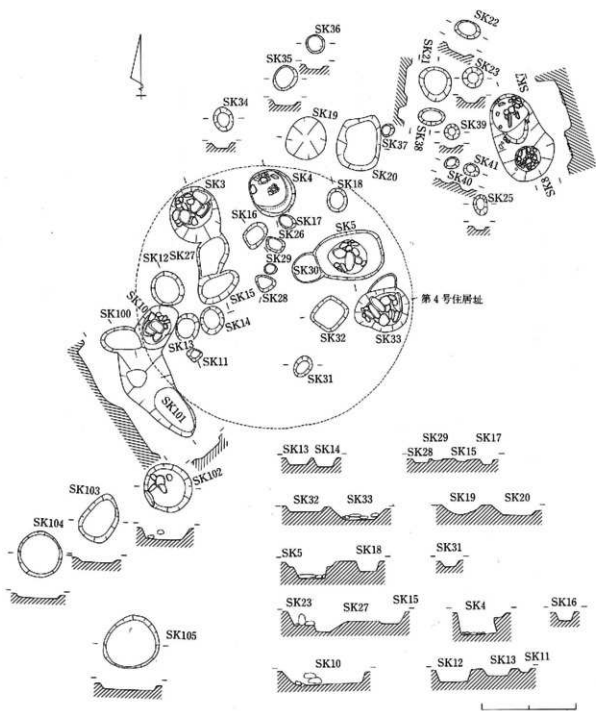
壁等はすでに存在しておらず、柱穴及び土壌によってその存在を確認した。柱穴は、取り替えが行なわれたと思われ、添うようにして二連ピットが存在していた。土壌は、SK3・4・5・10・33が規模の大きなもので、いずれも礫が入り込んでいた。SK3は、100×120cm、深さ20cmで底部から掘り切り部まで比較的偏平な河原石と一部鉄平石が入り込んでいた。SK4は、100×100cm、深さ50cmで袋状の形態をなしている。底部直上より少量の礫と伴に縄文中期初頭の深鉢形土器が1個体分が押しつぶされた状態で出土した。SK5は、140×100cm、深さ40cmで方形に近い楕円形をしており、内部には河原の礫が多量に入り込んでいた。SK33は、120×100cm、深さ20～25cmを測り卵形を成している。底部には扁平な河原礫が堆積していた。SK10は、100×70cm、深さ20cmを測り、楕円形を成している。底部には中央に扁平な礫が置かれ、その周囲には小礫が存在していた。柱を扁平な礫の上に乗せ、柱の周りに詰め石をして土を戻した状況がみられた。

遺物(第17図)は、住居址プランそのものがすでに存在していないため、柱穴や土壌から出土した以外のものは遺構外として取り扱った。また、柱穴や土壌内部にも多種多様な遺物が混入していたが、器形を保って出土したSK3、SK4の深鉢形土器を基準に時期設定を行なった。第17図1は、口縁部直径26cm、器高35cm、底径13.5cmを測る。口縁部は肥厚して折り返し状となり爪形状の沈線が描かれている。その直下には、格子目状沈線文、無文部を広く残すが縦面に沈線



第17図 第4号住居址出土土器実測図(1:6)

を描く文様帯、鋸齒状文の文様帯など、胴部上半においては大きく三段階の文様帯により構成されており、胴部下半においては、縦横の沈線で区画され、区画内が無文部のものや斜状沈線が施文されている部分も存在し、全体にバラエティーのある文様構成の土器である。2も同様の文様構成をもつ土器の底部である。石器は、石鏃、削器、搔器、石錘、凹石が出土している。

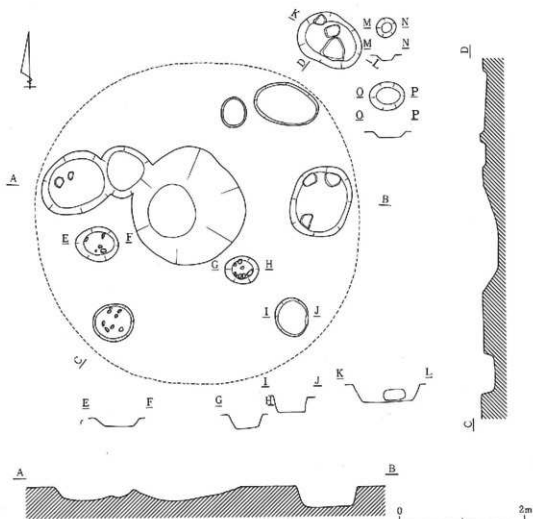


第16图 第4号住居址、SK7~105土壤实测图(1:60)

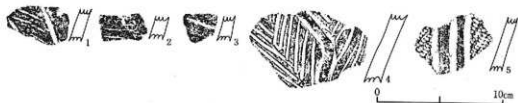
本址は、出土した遺物により縄文時代中期初頭の梨久保式期（五領が台式）に併行関係をもつ時期のものとみられる。

5. 第5号住居址（第18・19図、図版7）

本住居址は、調査区第2地点のほぼ中央で検出された住居址で、耕作等の影響と思われるに壁や床等プランのいっさいが存在せず、柱穴によって想定した住居址である。柱穴から推定すると、直径5m前後の円形プランかと思われる。柱穴は9個であるが、土壌とみられるものも存在し、判別しにくいものがある。多くは内部に小礫が混入し柱の詰め石と思われるが、全く存在していないものもある。本址も含め周囲全体は、礫床と砂質土で形成されているといてよく、小



第18図 第5号住居址実測図（1：60）



第19図 第5号住居址出土土器実測図(1:3)

礫から人頭大以上の礫が散在しており、しかも地下水が高くなり、湿地になっていた。また、暗渠排水路が各所に造られており、他からの水も第2地点に集中している状況であった。

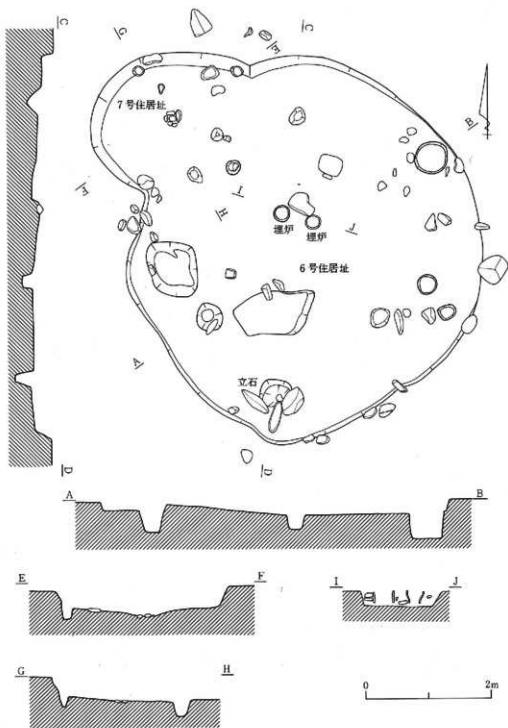
遺物(第19図)は、柱穴から出土した僅かな土器がある。周辺からは他にも土器や石器が出土しているが、遺構の様子から柱穴内部の土器を本址出土遺物とした。1~5の土器から縄文時代中期後半III~IV期の時期に比定されるものと思われる。

6. 第6号住居址(第20~23図、図版8)

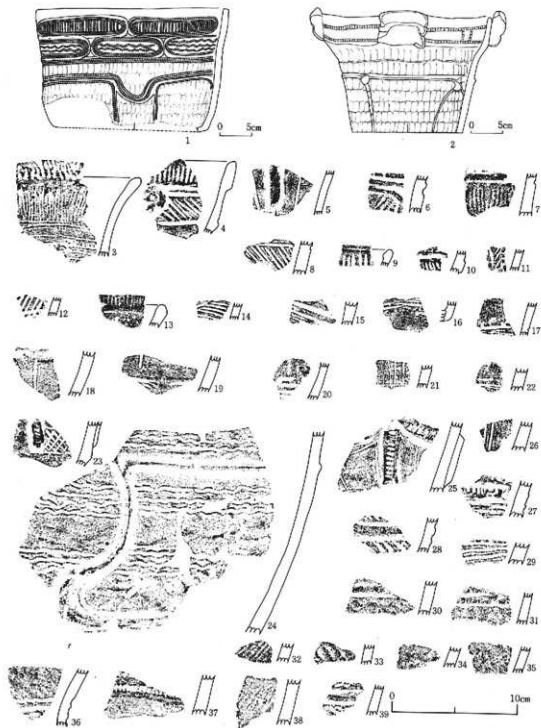
本住居址は、調査区第3地点の中央南寄りで町道に近接した所で検出された縄文時代中期中葉の住居址である。住居址の置かれている環境は、第4号住居址の南側にも当り、周辺のほぼ全体が礫で覆われているのに対し、礫がほとんど存在せず砂粒が混入した茶褐色土が堆積している状態であった。また、他の地域に比べれば地下水は低く、床の下部を流れている状況で、住居址そのものが多量の湿気を帯びるということはなかった。

プランは、東-西570cm、南-北630cmを測り各所が突出するような部分もある楕円形をなしており、壁高は20~25cmで、南側になる程低くなっている。本址は北西部に存在する第7号住居址と複合関係をもっており、第7号住居址→第6号住居址という順に掘年することができる。炉址は二基の埋燵炉が東西の位置に設置されており、掘り方は二基ともつながっており、東-西130cm、南-北60cm、深さ25cmを測る。埋燵炉に接する床及び下部の土壌は赤くあるいは灰褐色に焼成を受けていたが、内部に僅かな炭が出土しただけで焼土や灰等はほとんど存在しなかった。炉址の北側に扁平な礫が置かれており、使用目的に応じて設置したものであろうと思われる。床面は、地下水の状態やや軟弱な部分もあったが、全般に良好な状態を保っていた。中にはタキを成したようになり固く締まっている箇所もあった。柱穴は7個、土壌は1基検出された。床面下部は礫が堆積していたため、礫を取り除いて柱穴を掘ったと思われ掘り方も明瞭に確認された。南側の柱穴脇より立石が横たわった状態で検出された。また、立石を挟むように大きな河原石も存在していた。本住居址は、この時期としては規模が大きく不定形な形態をもつものであり、当地方としては貴重な資料の検出といえる。

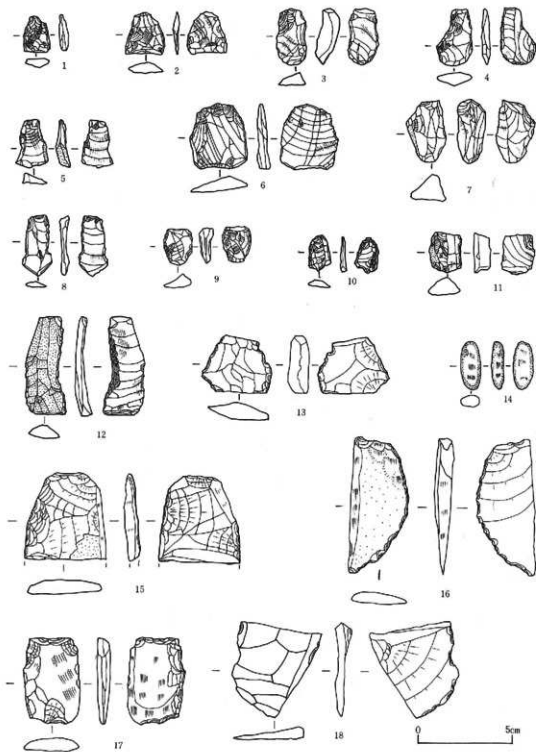
遺物(第21~22図)は、埋燵炉に使用された二個体の土器に代表される。1は口縁部直径31cm、器高19cm、底径25cm、器厚1cm前後を測る猪沢式土器である。器形は樽形でずんぐりしており、二



第20图 第6号·7号住居址实测图(1:60)



第21图 第6号住居址出土土器实测图 (1·2 1:6, 他1:3)



第22图 第6号住居址出土石器实测图(1:2)

段の横帯する文帯構成をもっている。口縁部の下部は、横長の楕円区画文で内部は縦状の押引文が施文され、その下部の文様帯は同じく区画文内部に波状に押引文が施文されている。またその下部には隆帯と押引文が交互に描かれている。2は口縁部直径27cm、器高18cm、器厚1cmを測り、いわゆる阿玉台式の深鉢形土器の胴下半部を意識的に打ち欠いて疑似口縁を作りだしたもので、胎土には雲母が混入している。口縁部には、特徴的な耳状把手が4個貼付され、把手との間を半截竹管の押引文が施文されている。胴部には隆帯により文様の構成がなされている。器面は輪積み後の指頭痕が全面に残り本期の特徴を示している。24も同様の竈沢式併行期の土器で、横走する数条の波状沈線単位に、数段の文様帯が施文され、さらに隆帯による文様構成がなされている。胎土には砂粒や雲母が多量に混入し、色調も黒褐色をなしている。第21図の他の土器は、第4号住居址主体の五領が台式土器やその他の土器が存在したりして時期的にバラエティーがあり、混入した可能性が高いが、いずれも中期前半から中葉にかけての資料である。

石器は、石鏃、削器、搔器、両極石器、打製石斧、敲石、磨石、石核などでここに立石が加わる。石鏃、削器、搔器は黒曜石製、打製石斧は安山岩礫、石核は頁岩であり、出土量の少ない石器ながら石材は多種である。

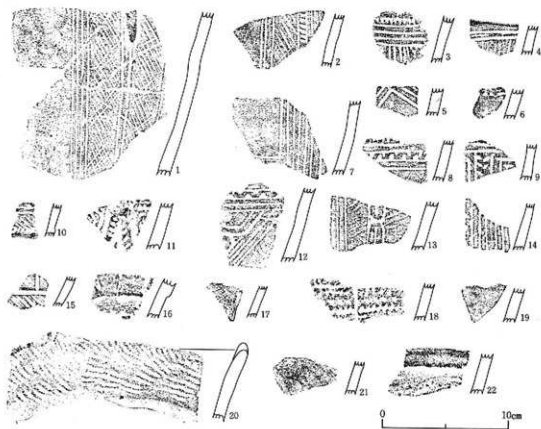
本住居址は、埋燗炉で使用している深鉢形土器から縄文時代中期中葉の竈沢式併行期の時期とみることができる。

7. 第7号住居址 (第20、23、24図、図版9)

本住居址は、調査区第1地点の中央南寄りで町道に近接した所で検出された縄文時代中期の住居址である。第6号住居址と複合関係をもっており、新旧関係は第7号住居址→第6号住居址の順に編年することができる。立地条件は第6号住居址と同様で、茶褐色土を掘り込んで構築している。

プランは、東-西の推定300cm、南-北の推定250cmで東西に長い楕円形になるものと考えられる。壁高は残存する部分で25-35cmを測る。東側から南側にかけての壁は、第6号住居址の構築の時に破壊され、また、複合する床面はほぼ同一レベルで構築されていたが、第7号住居址上に若干の張り床がみられた。炉址は、プランの中央部よりやや北側に、東-西27cm、南-北25cmを測り、方形に近い小規模なもので、床面を僅かに掘りくぼめて河原の小礫を置いている程度の構造で、内部には焼土や灰等は存在していない。柱穴は合計5個検出されており、深さは床面から20-25cmと深く良好である。南側の柱穴は底部に扁平な河原礫が敷かれ、掘り切り口よりやや下部には小円礫が壁面に存在した。床面の状態は極めて良好であり、タタキをなしたように固く締っていた。床面上には礫が僅かに散在しており、中でも河原の扁平礫が多かった。

本住居址の床面下には地下水が流れており、第6号住居址も同様であったが柱穴を掘り上げると水が満水に近い状態となった。上吹地籍の中にあっては立地条件の比較的良好な所であるが、遺跡そのものの条件としてはやや条件に欠ける地域であるといえる。



第23図 第7号住居址出土土器実測図(1:3)

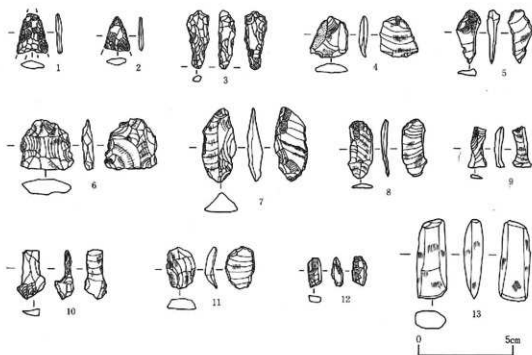
遺物(第23・24図)は、土器・石器合わせてもそれ程多くは出土していないが、床面あるいは直上からの出土が多く、時期を知るには良好な資料といえる。第23図1~19は、中期前半の五領が台式にかかる時期に併行する土器である。8は交互刺突がなされており胴部の最上部の土器である。その他も胴部の資料が多いが1・2・7は、縦条の沈線にその間に細い原体で斜状の沈線を施文しているものである。石器は、石鏃、石錐、両極石器、削器、挿器、磨製石斧が出土している。

本住居址は、縄文時代中期前半の五領が台式期に併行するものと考えられる。

8. ピット及び土壌(第25~43図、図版10)

遺構(第25~31図、図版10)

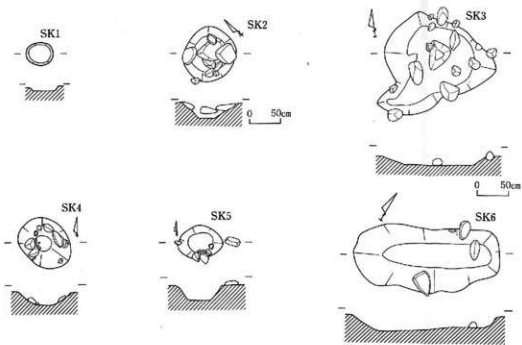
検出されたピット及び土壌は、住居址に伴うものを除くと合計125基検出された。しかし、ピットと土壌の種別をどこで行なったらよいのかという問題があり、本遺跡の場合土を掘り込んだ



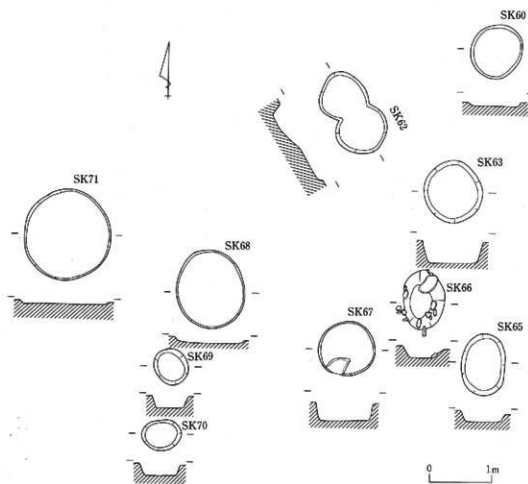
第24図 第7号住居址出土石器実測図(1:2)

穴という解釈により「SK」とし、統一した番号を付した。ピットとみた場合、住居址等建物址あるいはその他の柱を埋めるために掘った穴、柱の立っていた穴という確認がなされなければならない。また、土壌は柱の存在した穴以外の土を掘り込んで構築した穴、施設という解釈が必要である。柱穴は、小規模ではほぼ丸型、土壌は標準的な柱穴よりも規模が大きく、形状はさまざまに不定であるとして一般的には理解されるが、環境の変化による変形や、柱穴とみられても単独で検出されたり、配列をみても施設としての特定ができなかったり、あるいは土壌とも理解される規模・形状のものがあったり、本来の機能・用途を特定することは非常に難しいものが多い。従ってここでは、実測図と概観を示すことにし説明とする。

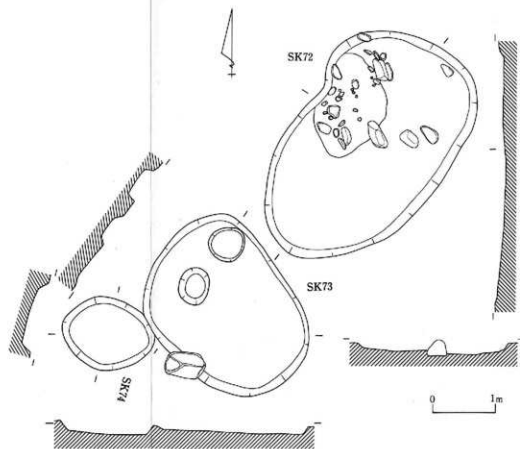
調査区第1地点のピット及び土壌は、最西端のやや南寄りて検出された一群(第30・31図)で、円形状に小ピットの配列も考えられたが、住居址等遺構の決定的な根拠はみいだすことはできなかった。しかし、全体に北-南に連なる一群であり、何らかの遺構に伴うピット、土壌群であることには間違いなく、性格は不明であるが貴重な検出である。この一群の他に、第4号住居址周辺部にピット・土壌群(第25・27・28図)が存在している。第4号住居址そのものも上部が耕作等により削平されており、残存するピットと土壌の配列により確認をした遺構であり、その周



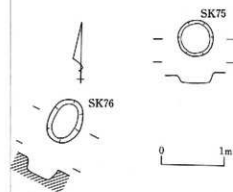
第25回 SK1-6土坑実測図(1:60)



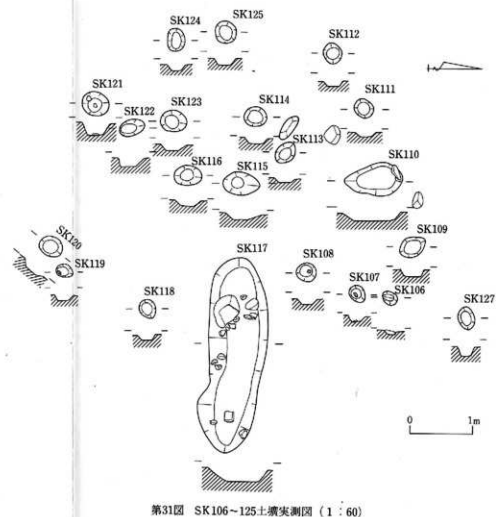
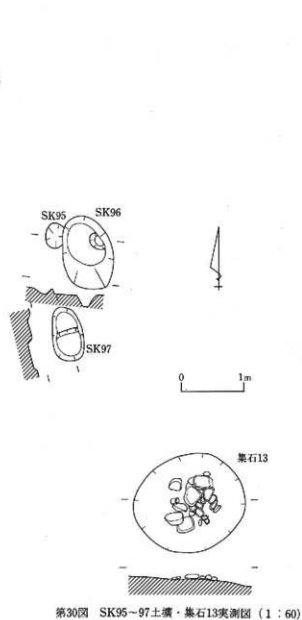
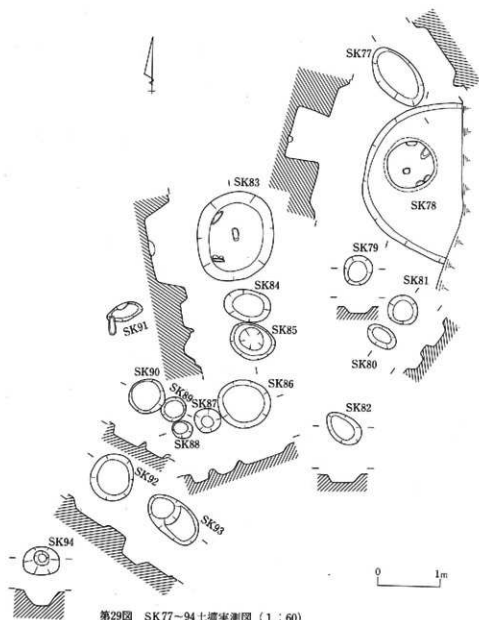
第26回 SK60-71土坑実測図(1:60)



第27回 SK72-74土坑実測図(1:60)



第28回 SK75・76土坑実測図(1:60)



団に存在するピット等も当然上部が切られている筈である。また、第4号住居址に関連する施設である可能性が高い。第27図のSK72~74は、浅いが比較的規模の大きな土壌である。SK72は、410×425cmで内部にさらに礫を伴った浅い掘り込みがあった。SK73は、295×220cmで底部に2個のピット状の掘り込みが存在した。SK74は、145×120cmで底部は平坦で浅い。SK2~6は、礫を伴っており、柱穴の可能性が高いが遺物も出土しているため、その他の施設としても考慮しなければならないと思われる。

調査区第2地点では、第5号住居址の周囲にピット及び土壌（第26図）が検出されている。規模の大きなものはSK71の135×150cm、小規模なものはSK69の60×50cmで、垂直に近い形で掘り込まれているものが多い。建物址等の遺構の配列を把握することはできなかった。第5号住居址に関連する施設とも考えられるが、現状では確認することができなかった。

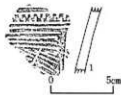
調査区第3地点では、第1号住居址の北側で、第3地点中央部より南側にピット群と土壌（第31図）が存在していた。小規模なピットが多数集合しており、その脇に細長い楕円形の土壌が位置していた。ここでも建物址等の遺構としての配列は把握されなかった。土壌は、320×100cm、深さ30cmを測る。内部には僅かな小礫が存在していた。

遺物

遺物の出土したピットや土壌は、検出された遺構全体からみるとかなり少なく、また、出土量も少ない。

第1地点SK2（第32図）からは、縄文時代中期前半I期の土器が出土しており、第4号住居址・SK4出土土器と同様の型式である。SK3（第33図）、SK4（第34図）からも同様、中期前半I期の土器が出土している。SK6（第35図）、SK14（第36図）は中期後半の土器で、縄文と沈線が主体に施文されている。SK17（第37図）、SK18（第38図）、SK26（第39図）の3基からは中期前半I期の土器が主体に出土している。梨久保式そのものの土器ではないが、影響を強く受けた土器である。上吹上遺跡の主体ともなる土器である。

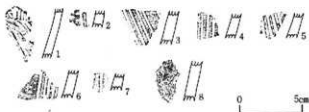
第40・42図は、第2地点から出土した土壌の資料で、縄文時代中期後半に比定されるものである。第40図5・6は、中期末から後期初頭に比定してもよい土器である。



第32図 SK2土壌出土
土器実測図（1：3）



第33図 SK3土壌出土
土器実測図（1：3）



第34図 SK4土壌出土土器実測図（1：3）



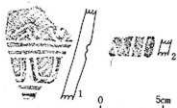
第35图 SK 6土坑出土
土器实测图 (1:3)



第36图 SK14土坑出土土器实测图 (1:3)



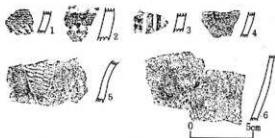
第37图 SK17土坑出土土器实测图 (1:3)



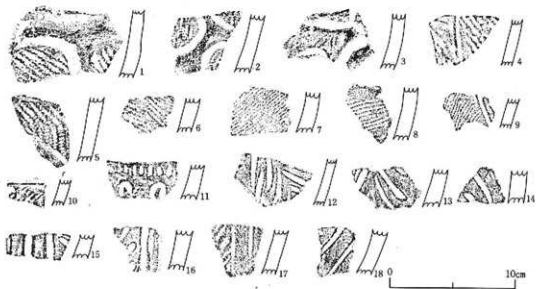
第38图 SK18土坑出土
土器实测图 (1:3)



第39图 SK26土坑出土
土器实测图 (1:3)



第40图 SK110土坑出土土器实测图 (1:3)

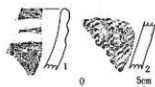


第41图 SK117土坑出土土器实测图 (1:3)

第41、43図は、第3地点の土壌より出土した土器で、いずれも縄文時代中期後半に比定されるものである。第41図1～3は、加曾利E系IV期の資料で、楕円区画文が崩れて隆帯による文様構成と地文である縄文が施文されている。4～10は、地文が縄文で沈線により縦長の楕円に近い文様構成をもつものである。11は曲玉文と呼ばれる太い沈線により描かれている土器、12～18は、いわゆる唐草文系IV期の土器群で、綾杉文を基調としている。第43図1は、横帯する太い沈線が施文されているもの、2は斜縄文が施文されている。



第42図 SK115土壌出土土器実測図 (1:3)



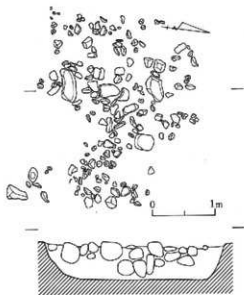
第43図 SK120土壌出土
土器実測図 (1:3)

集石 (第44～55図、図版11～13)

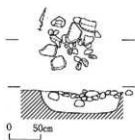
上吹土遺跡全体は沖積地であり、氾濫原であるため自然に堆積した礫が広範囲に散布していたが、その中において調査区第1地点の北西部には11基の集石が検出された。それぞれの規模や形態はさまざまであり、また、周囲の礫との関連もあったため、把握するには大変困難を要した。

9. 第1号集石 (第44図、図版11)

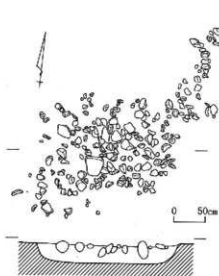
本址は、第1地点の県道寄りで、北西部の隅に近い所で検出された。250×300cmを測り、南北にやや長い形態をしている。堆積している角礫や河原石を用いており、中には大礫も含まれていた。集石の下部は直径300cm、深さ30cmの土壌であり、大礫が底部直上まで入り込んでいた。遺物等は何も出土していない。



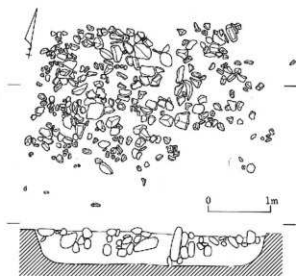
第44図 第1号集石実測図 (1:60)



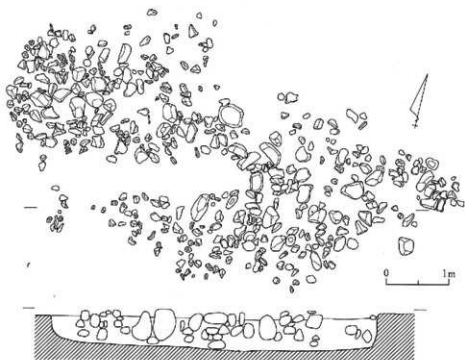
第45図 第2号集石実測図 (1:60)



第46图 第3号集石实测图 (1:60)



第47图 第4号集石实测图 (1:60)

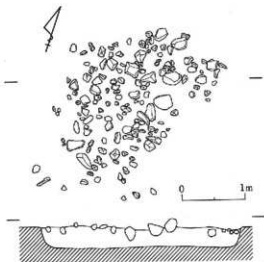


第48图 第5号集石实测图 (1:60)

10. 第2号集石 (第45図、図版11)

第1号集石のすぐ南側で検出された。本址の南側には暗渠排水路が東西に走っており、一部これに切られる状態になっていた。規模は100×100cmの小規模なもので、深さは25~30cmを測る。

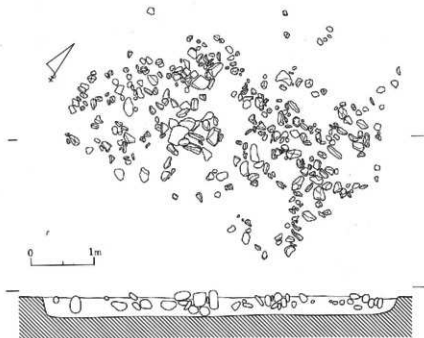
礫は底部にまでは達しておらず、土層の上部を覆う状態となっていた。内部からは遺物等は何も出土しなかった。



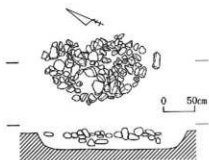
第49図 第6号集石実測図 (1:60)

11. 第3号集石 (第46図、図版11)

本址は、第2号集石の南側で検出された。鉄平石が少量混入しているが、大部分は河原石と山石である。220×150cmを測り、やや北東から南西へと延びている感はあるが円形に近い形態を基本にしている。下部の土層は、直径260cm、深さは20cm程で、内部には集石の一部がくい込



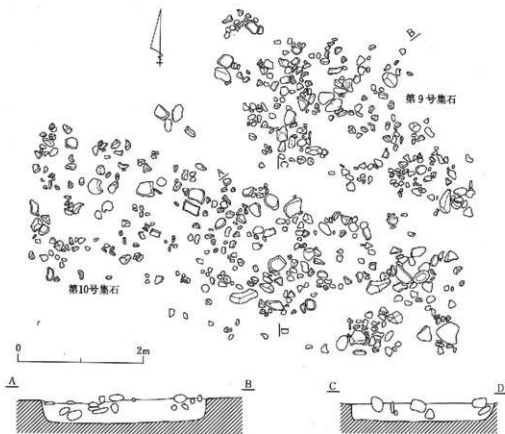
第50図 第7号集石実測図 (1:60)



第51图 第8号集石实测图 (1:60)



第52图 第8号集石出土
土器实测图 (1:3)



第53图 第9号·10号集石实测图 (1:60)

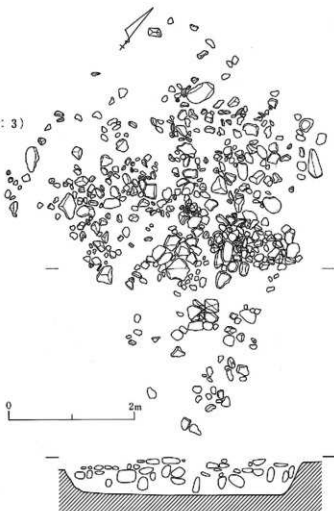


第54図 第9号集石出土土器実測図(1:3)

む形で入り込んでいただけで何も出土しなかった。

12. 第4号集石(第47図、図版5)

本址は、第1地点北西部の第2号集石の東側に隣接して検出された。330×220cmで方形に近い楕円形を呈し、深さ70cmを測る。礫の多くは河原石であるが山石や鉄平石が少量含まれていた。集石下部の様子は、直径365cmの土壌が存在した。中央部には、立石とも考えられる長い石が立てられており、祭祀的な様相がある。内部には、比較的礫が入り込んでいた。



第55図 第11号集石実測図(1:60)

13. 第5号集石(第48図、図版12)

本址集石址は、調査区第1地点の北西部で最も県道に近い所で検出された。中央部に東西に走る暗渠排水路が設けられており、切られてしまっていた。規模は、650×400cmで北西-南東に広がっており、河原石や山石が混在していた。中には鉄平石の大きな平石を配置しているものもあった。集石の下部は、520cmの土壌が存在し、深さは50cmを測る。内部には大小の礫が多数入り込んでいた。

14. 第6号集石(第49図、図版12)

本址は、第1地点の北西部で第5号集石の南側に隣接して検出された。280×280cmを測り、や

や北東から南西へと長い楕円形状を呈している。上面の扁平な河原石や山石、僅かな鉄平石が集合していた。下部には直径320cm、深さ30～32cmの土壌が存在していた。内部からは何も出土しなかった。

15. 第7号集石 (第50図、図版12)

本址は、第1地点の北西部で第6号集石の南側で検出された。規模は500×350cmで、かなり広範囲に拡散するように集石がみられた。全体には北西から南東方向にやや長い楕円形を呈しているが、所々に礫が散在していた。扁平の河原礫や山石、僅かな鉄平石が集合していた。礫は、下部に存在する直径最大565cm、深さ30cmの土壌上に乗っており、明らかに土壌を埋めてからその上部に礫を置いていることは間違いない。内部からは遺物等は出土しなかった。

16. 第8号集石 (第51・52図、図版12)

本址は、第1地点中央部よりやや北側で検出された。規模は200×100cmで東西に長い楕円形を呈しており、検出された集石の中では最も密に礫が集合しまとまりがよい。下部には直径240cm、深さ30cmの土壌が存在しており、内部からは混入と思われる縄文時代中期末葉の土器片(第52図)が出土している。

17. 第9号集石 (第53・54図、図版12)

本址は、第1地点のほぼ中央部で検出されたが、第10号集石とした一群が隣接しており、集石そのものでは区分の困難な状況にあった程入り組んでいた。比較的小きな礫が散在し、そこに河原礫と山石が混在していた。下部には土壌がみられたが、集石全体をカバーしているものではない。内部からは、縄文時代中期の土器片が少量出土した。

18. 第10号集石 (第53図、図版10)

本址は、第9号集石に隣接して検出された。規模は、700×250cmで東西方向に極めて長い形状であった。石材は、所々に鉄平石が置かれている他は、河原の扁平もしくは円礫であり、山石も含まれていた。礫の集合の様子は、密集状態というよりは比較的散在しているといった方がよい。土壌も検出されているが、内部からは礫が含まれているだけで遺物等は何も出土しなかった。

19. 第11号集石 (第55図、図版12)

本址は、第1地点のほぼ中央部で検出された。規模は、400×500cmで、集中箇所は直径400cmのほぼ円形となるが、南側に100cm程礫が散在的に広がっている。僅かな鉄平石を含むが、大部分は河原の扁平もしくは円礫及び山石で、人頭大の礫も含まれていた。下部には直径390cm、深さ45～50cmの土壌が存在していた。礫以外は遺物等何も出土していない。

第2節 遺構外出土遺物

上吹上遺跡から出土した遺構外の遺物は、遺構から出土した遺物に比較すると帯びだしい量に及んでいる。これらの出土遺物は、各時代・各時期にわたっており、本遺跡の歴史的経過を如実に物語っているものである。これら遺構も含め遺物の分析を行なうことにより、歴史的経過を明確に位置づけることができ、また、文化の性格を知る重要な手掛りともなるものである。

本書に図示した資料は、全体の僅かな部分に過ぎず、また、考察もその一端にふれるに過ぎないが、基本的な部分を示すことにより概要としたい。

1. 縄文時代の遺物（第56～82図、図版14～25）

早期 縄文時代早期の遺物は、土器しか把握できなかつた。第56図1～13で、1は山形押型文土器で、無文部を残し横走る帯状施文がなされており、桶沢式類似の資料である。2・3は内外面ともに貝殻条痕により器面調整している無文土器で、石英が多量に混入している。4・5は貝殻緑文土器で、横走る沈線間に施文されている。胎土には雲母が多量に混入し、僅かに黒曜石粒も含まれている。6～8は網目状の燃糸文土器である。器厚は0.7cm以上と厚く、胎土には石英が混入し、黒褐色を呈する焼成良好の土器である。9は雲母が僅かに混入した無文土器で、器面はなだらかで調整痕はない。10は燃糸文土器で、灰白色を呈している。繊維の混入はない。11は内外面ともに粗製の厚手の土器で、パミスが多量に含んでいる。

前期（第56図） 12～33は前期の土器であるが、22～33は若干の疑問が残る。14は羽状縄文が施文されている口縁部の資料で、焼成良好で赤褐色を呈している。22～33は同一個体の土器で、器厚の変化が激しく、器面が荒れており、厚手の粗製ともいえる資料である。器面には太い隆帯を不規則に貼付し、その間を櫛歯状工具による突き刺しが行なわれている。一見縄文が施文されているように見えるが明らかに突き刺しによる全面施文である。突き刺し文は神ノ木式に近似しているが、原体がさらに長く、胎土自体も異なるので位置づけが難しい資料である。

中期（第57～72図） 出土土器の中では中期の土器が圧倒的に多く、特に中期初頭から中葉にかかる時期と後葉の資料が多い。中期初頭の資料は、第57～61図に示されているもので、中部高地の編年というと梨久保式及び九兵衛尾根Ⅰ・Ⅱ式に併行関係をもつものであるが、関東五領が台式土器でないしはそれらの影響を強く受けているものである。器形は口縁部がやや外反ぎみに立ち上がり、頸部は内側に直線状にくびれ、胴部はほぼ垂直にしかも直線状に底部まで至るというもので、口唇は丸味を帯び、口縁部に刻目ないし棒状工具による突き刺しが行なわれている。口縁部直下には数条の沈線が巡り、この沈線下部に沈線による格子目条の文様帯が巡っている。頸部には、縦状の沈線により区画文が施文され、その下部には再び器面を巡る沈線文が描かれている。胴部には、数条の縦状沈線と横走る数条の沈線とにより区画が描かれ、胴部上半の区画内には斜状沈線文が施文されている。文様は底部直上にまで行なわれていることも特徴で、数条の横走る沈線と沈線に沿いながら半截竹管による刺突が行なわれている。口唇には刻目が施さ

れたアンモナイト状の円形渦巻把手が二個貼付され、また、この渦巻把手を支えるかのように、頸部と胴部の接点に刻目のある5～6cmの隆帯が貼付されている。第57～61図11までは、大方以上のような器形及び文様形態をもつものとして理解することができる。但し、第61図1～第62図11は、特に九兵衛尾根Ⅰ～Ⅱ式にかけて近似性のある土器であり、特徴をよく現わしているものである。第61図12～23は、同時期の浅鉢形土器である。12は口唇及び内面ともに押引文が施文されている。13は、口唇及び内面に押引文が施文され、さらに器面に数条の沈線文が描かれている。口縁部はいずれも5つの波長をもち、波状部の先端はくびれている。23までの資料は、いずれも厚手で雲母が混入している。

以上の中期初頭の類似土器は、望月町においては春日の竹之城原遺跡で破片資料であったが多量に出土しているが、器形復元ができたのは上吹上遺跡第4号住居址の資料が初めてである。尚千曲川水系ではこの時期の資料は極めて少なく、併行期の土器として長門町の片羽遺跡にみられる程度である。

中期前葉の資料は、猪沢式・阿玉台式併行期にみられる第62図の資料があり、出土量は比較的少ない。これらの代表的土器は、第6号住居址の二基の埋燵炉に使用された資料であり、一方は阿玉台式土器、もう一方は猪沢式土器である。文化の拠点の異なる土器が、上吹上遺跡では双方を同時期に取り入れている。第62図の土器は、これらの文化の所産である。望月町におけるこれらの土器は、春日の後沖遺跡が代表的で、住居址や土壇から多量に出土している。

中期後葉の土器(第63～72図)は、全体の出土量からすると最も多く、中でも中期の最終末に属する資料が圧倒的に多い。第63図1～5は、中期後半Ⅲ期に属するもので、加曾利EⅢ式及び曾利Ⅲ式に併行関係をもつものである。隆帯による渦巻文と貼付文を基本とし、その周囲を綾杉状沈線で充沈している。6・7は、Ⅲ期からⅣ期にかかる土器で、口縁部直下に楕円区画文が施文され、沈線が描かれている。第63図8～第68図16までは、縄文系の土器で、中期の最終末に比定されるものであり、特に中期の深鉢形土器が多い。文様形態は、地文に縄文が施文され、さらに隆帯により口縁部直下から円形に近い形で器面に貼付されている。口縁部直下においては、器面を一周する隆帯が貼付されているものが多い。器面に対してS字状の太い沈線が施文されているものも存在する。これらの中期後半の縄文系土器は、厚手で大形の深鉢形土器が多い。第68図17～43は、数条の歯をもつ歯歯状工具により、直線ないしは曲線を施文した土器である。この文様をもつ土器は、胎土に砂粒が多く混入し、色調は全般に白っぽく、焼成はやや不良と思われ、粗製の分類に入るものである。この類の土器は、協和の平石遺跡など数遺跡から出土しており、胎土、色調ともに近似している。第69～71図は、唐草文系土器群を一括した。いずれも中期後半Ⅳ期に属するものである。第69図1～21は、口縁部直下が横長の楕円区画文が回り、その下部から全面に渦巻状の沈線文と綾杉状に近い沈線文が施文されているものである。22以降は、いずれの形態にせよ綾杉状が施文されている土器である。沈線による区画と綾杉文との組み合わせが最も多い。第71図33～41の綾杉文の土器は、これらⅣ期の中にあつては最終末に位置づけられるも

のであり、中期文様形態の最後のなれのはてという様相を呈している。

中期後半IV期の土器は、望月町においては最も多量に出土しているものであり、協和の下吹上遺跡や平石遺跡はその代表である。

第72図は、縄文時代中期から後期にかかる時期の資料であるが、どちらかと言うと中期的な資料を分類したものである。全て縄文系の深鉢形土器である。28は後期と分類してもよいと思われる文様が施文されているが、胎土が中期的である。27は把手をもつもので、恐らく両耳把手付の深鉢形土器であると思われる。

後期 後期の土器は、余り出土量が多いとはいえないが、状況を示す良好な資料が出土している。第73図は、後期初頭の土器で、沈線による区画文と磨消縄文が主体の文様構成である。精製土器が多く、器面はなめらかであり、浦谷BⅠ式で称名寺Ⅰ式に併行関係をもつものである。第74図1～12は、地文に縄文が施文されておらず沈線のみで文様構成されている土器で、全般に厚手である。11はこの中では浦谷BⅡ式になる可能性も考えられるが、その他は浦谷BⅠ式の中でも称名寺Ⅱ式と併行関係をもつものと考えられる。13～21は、浦谷BⅢ式で称名寺Ⅱ式に併行関係をもつもので、かなり小型の深鉢形土器である。口縁部直下の上下2本の沈線間に、磨消縄文が施文された文様帯が器体を巡っている。22は精製の注口土器の破片で、独特の文様形態が特徴である。26～34は、浦谷BⅣ～Ⅴ式で加曾利BⅠ～Ⅱ式に併行する土器である。口縁部直下に3～4条の沈線が施文され、器面全体は磨消縄文が施されている。

石器 (第75～82図)

上吹上遺跡から出土した石器は、全体的にそれ程量は多くないが、各種まとまったものが出土しており良好な資料といえる。しかし、これらの石器は時期区分することは不可能であるため、その意味では遺構外資料は、資料的価値が半減していると言わざるを得ない。

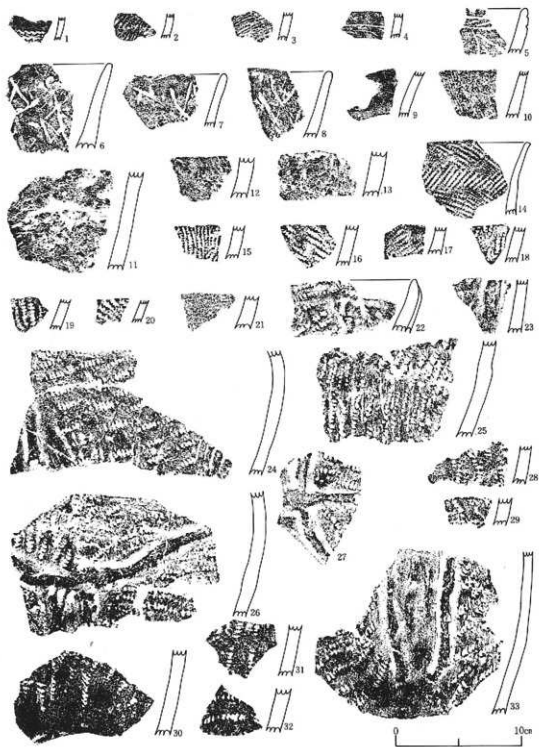
第75・76図は、石鏃である。総数は、完形品・欠損品・未製品を合わせると180点出土している。長身鏃、長脚鏃、三角鏃、有柄鏃、無柄鏃に分類することができ、長身鏃が最も多い。石材は、ほとんどが黒曜石であり、他にチャート製が数例みられる程度である。

第77図、第78図1～9、第80図14～16・18は打製石斧である。出土総数は86点を数える。形態は、短冊型、撥型、分銅型の三種類に大きく分類することができ、中でも短冊型と撥型に近い形態の資料が最も多い。中央部に抉入部の明瞭なものも多い。刃部の形態は、どちらか一方に傾く斜刃が多く、使用痕も明瞭な資料が幾つかみられる。

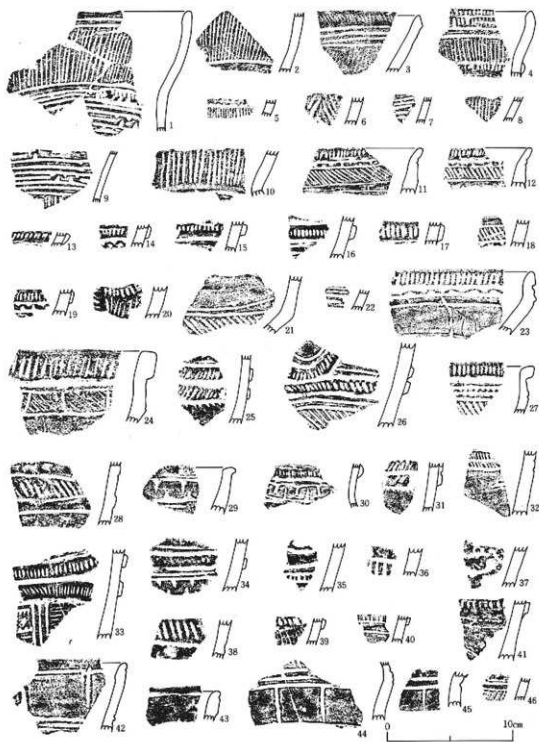
第78図10～15は磨製石斧で、10は緑泥片岩製で欠損品であるが、現状で12cmを測る大型の資料である。13は、両面が極めて良好に研磨されているが、周囲はかなり磨耗しており、磨製石斧の機能を失った後に他の目的に再利用していたのではないかとみられる。

第78図16は石棒で、欠損して頭部のみ残存している。比較的小型の無頭石棒とみることができる。

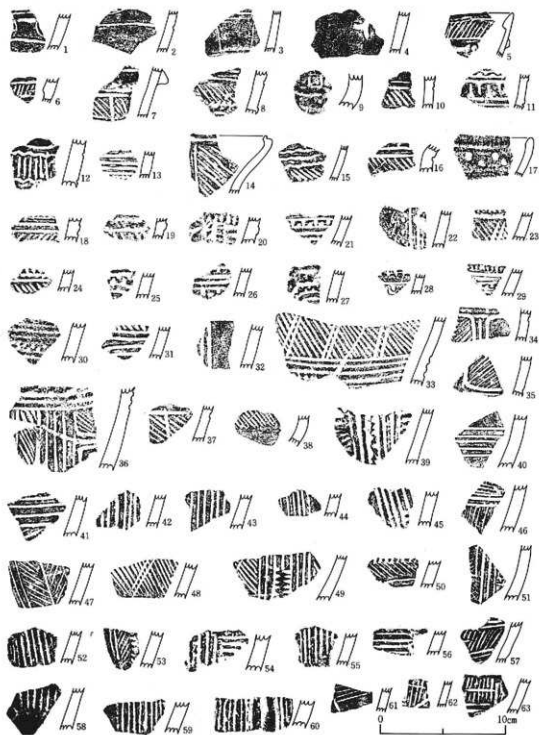
第79図1～13は石鏃である。出土総数は20点で、基部あるいは先端が欠損しているものもみら



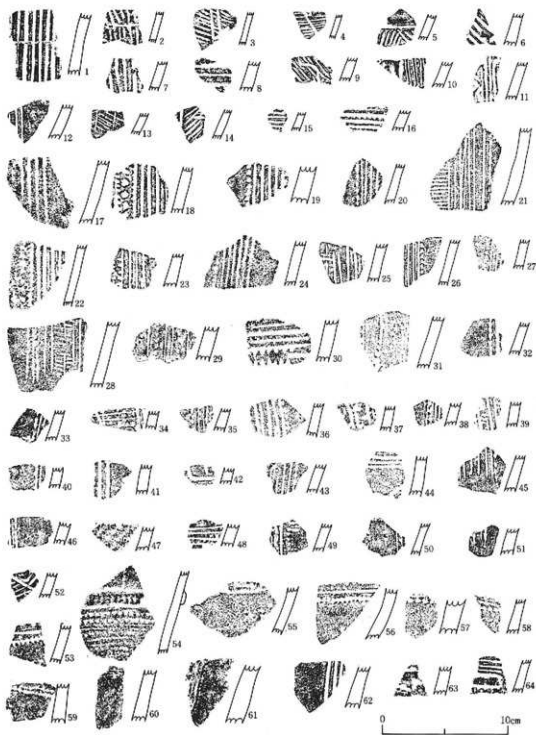
第56圖 遺構外出土土器実測圖 (1 : 3)



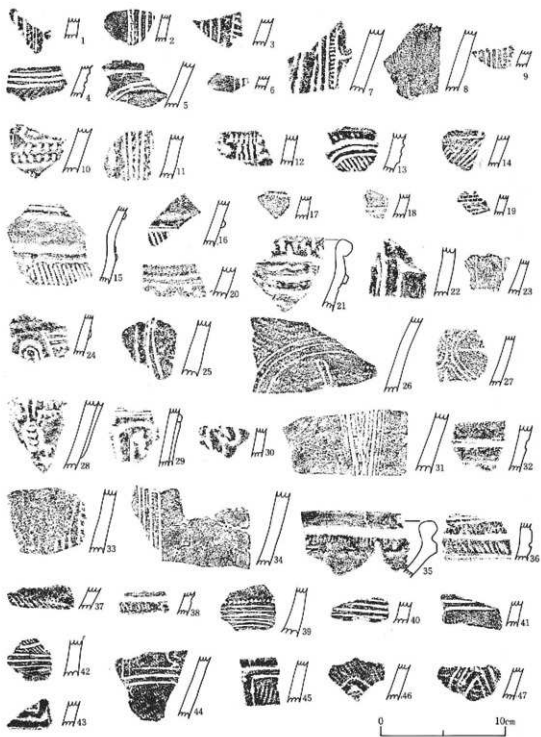
第57图 道槽外出土器实测图 (1:3)



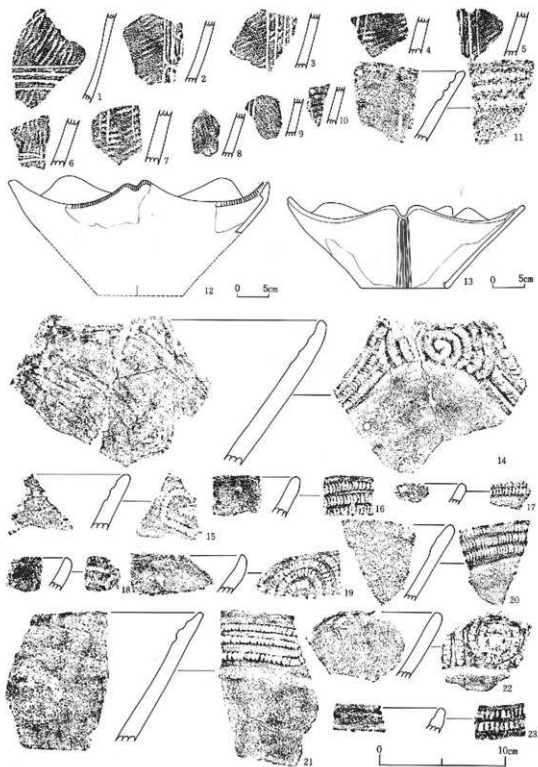
第58图 遺構外出土土器実測図(1:3)



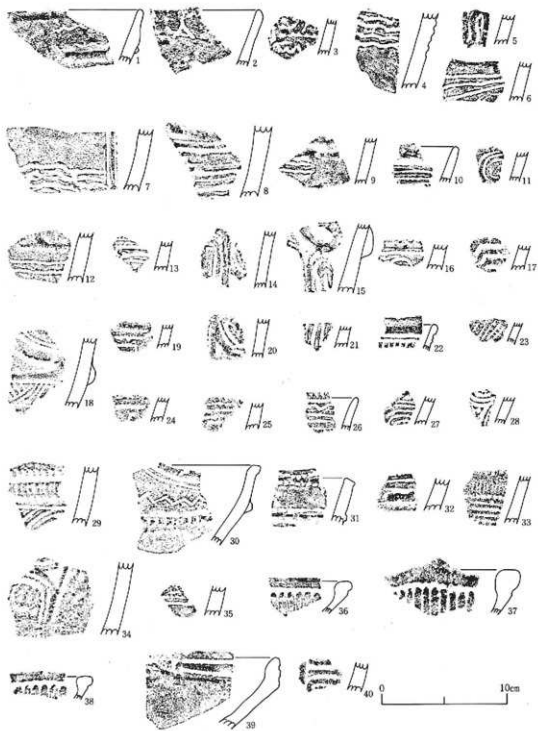
第59图 遗物外出土器実測图 (1:3)



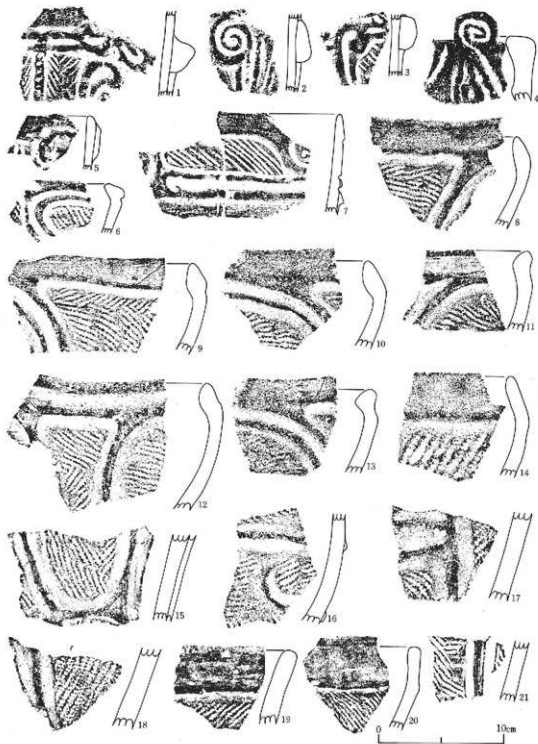
第60图 遗物外出土器实测图 (1:3)



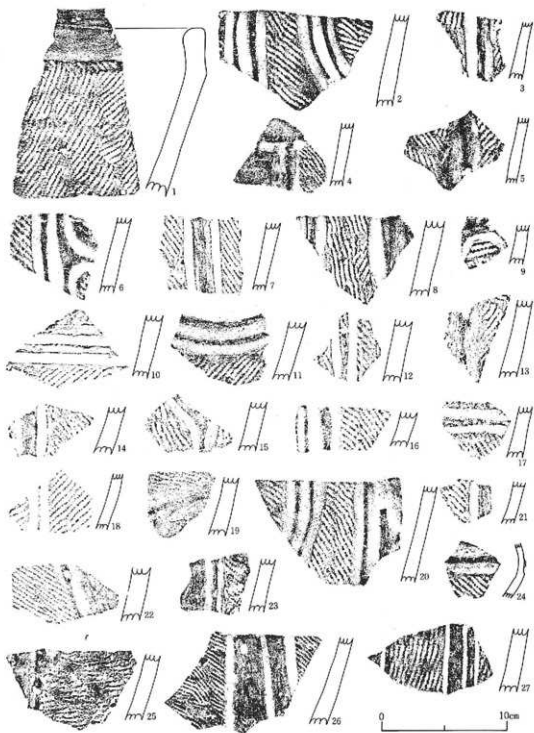
第61图 遼構外出土土器実測图 (12·13 1:6, 他 1:3)



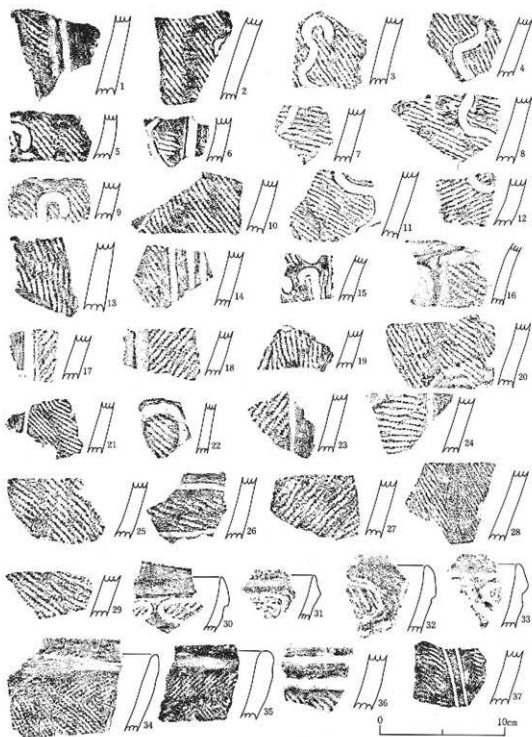
第62图 滇滇外出土器实例图 (1:3)



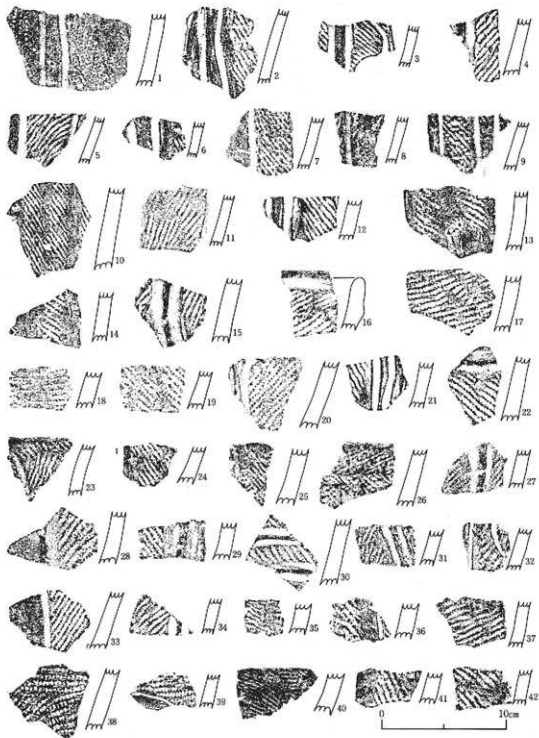
第63图 造模外出土器尖测图(1:3)



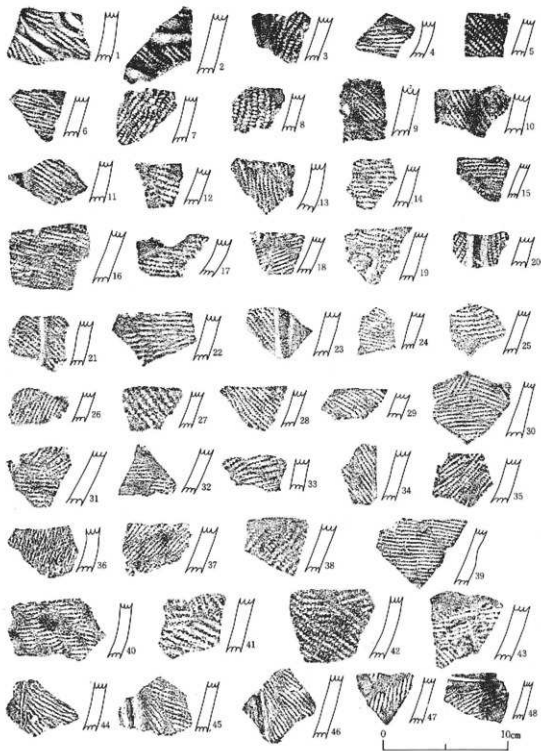
第64图 遺構外出土器実測図(1:3)



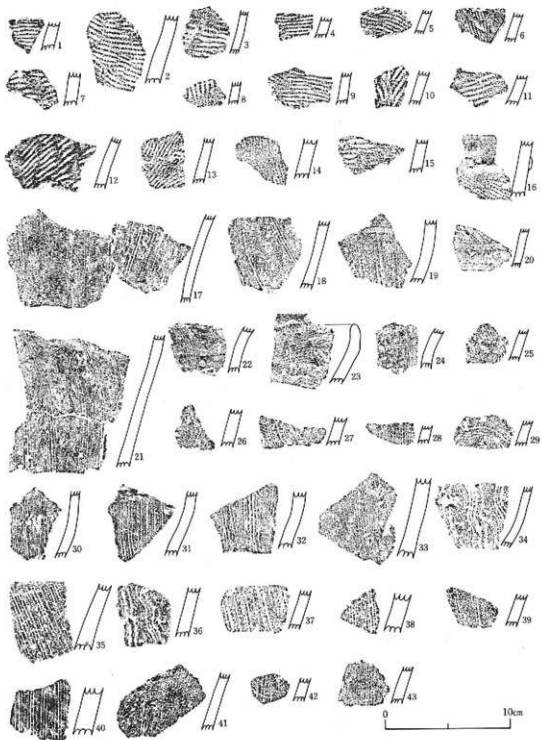
第65圖 遺構外出土土器実測圖 (1:3)



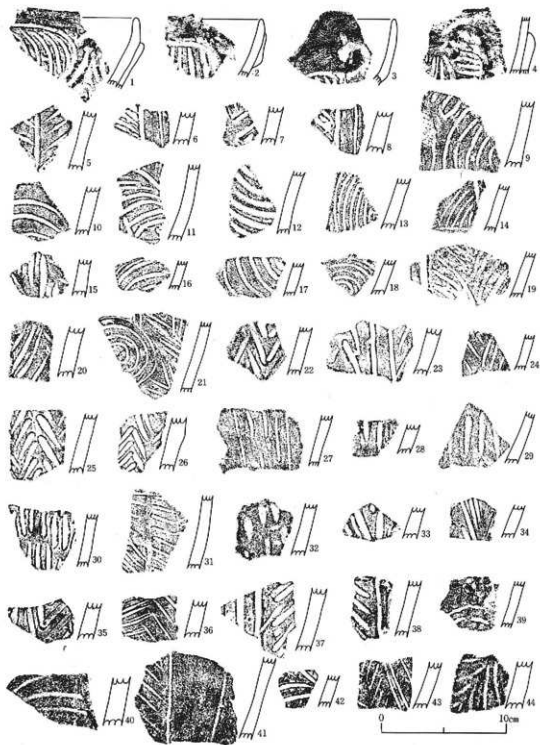
第66图 遼情外出土土器実測图 (1:3)



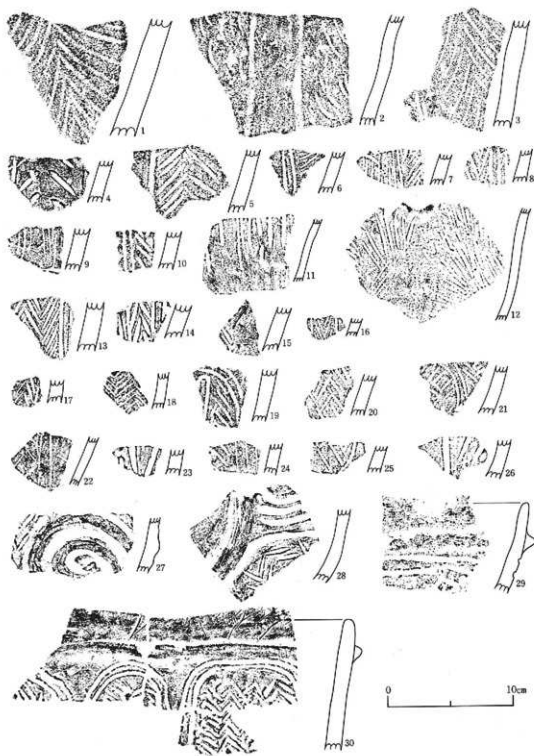
第67圖 遺構外出土土器実測図 (1 : 3)



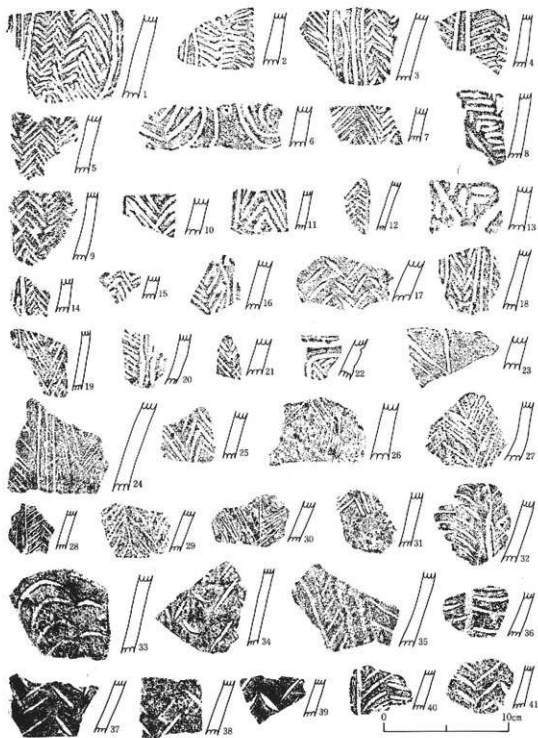
第68图 遼陽外出土土器実測图 (1 : 3)



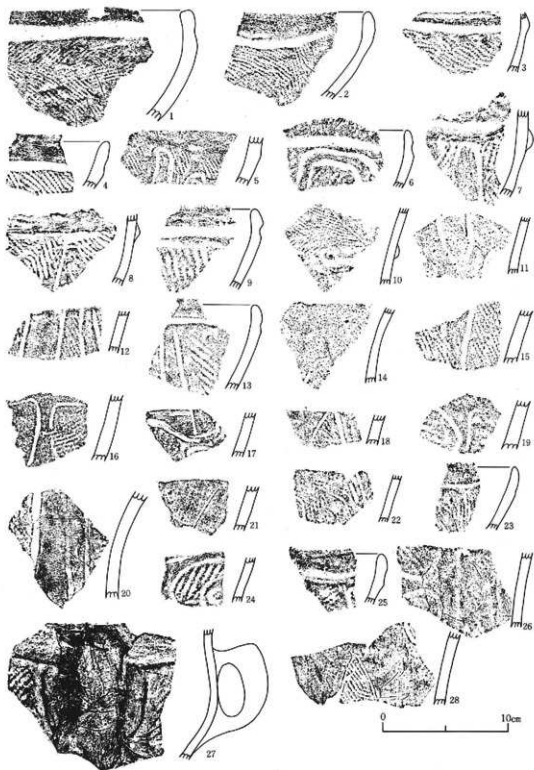
第69图 遺構外出土器実測図 (1 : 3)



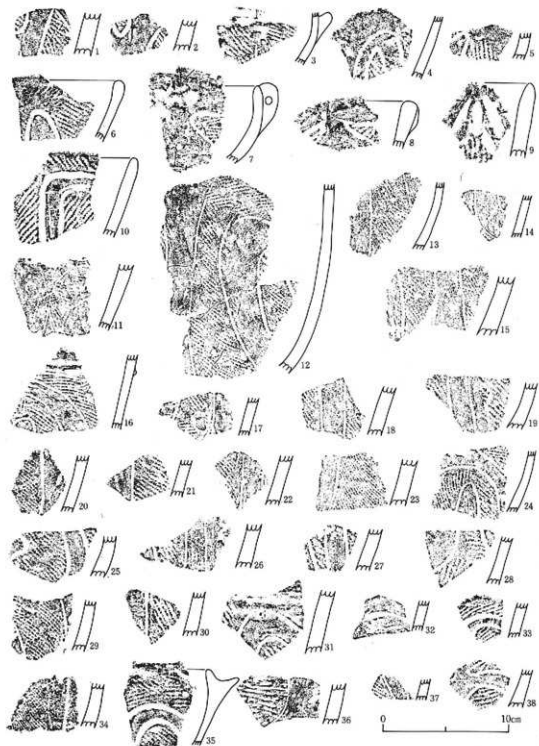
第70图 遼構外出土土器実測图 (1 : 3)



第71图 遗物外出土器实测图(1:3)



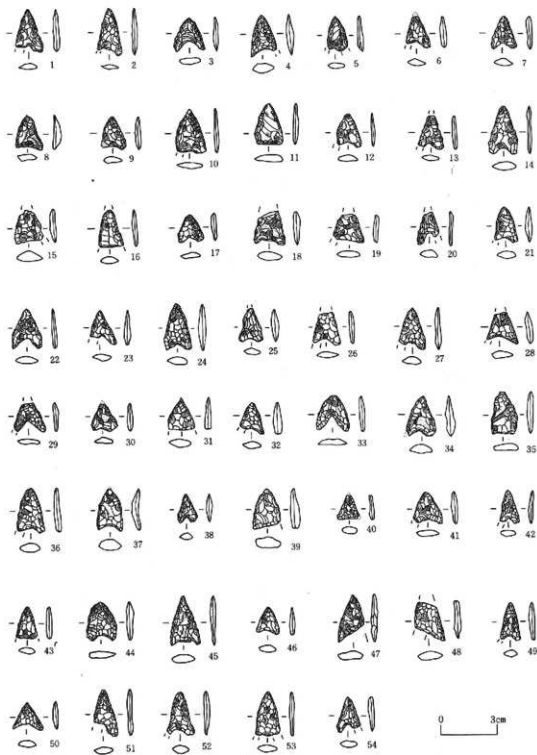
第72圖 遺構外出土土器実測圖 (1:3)



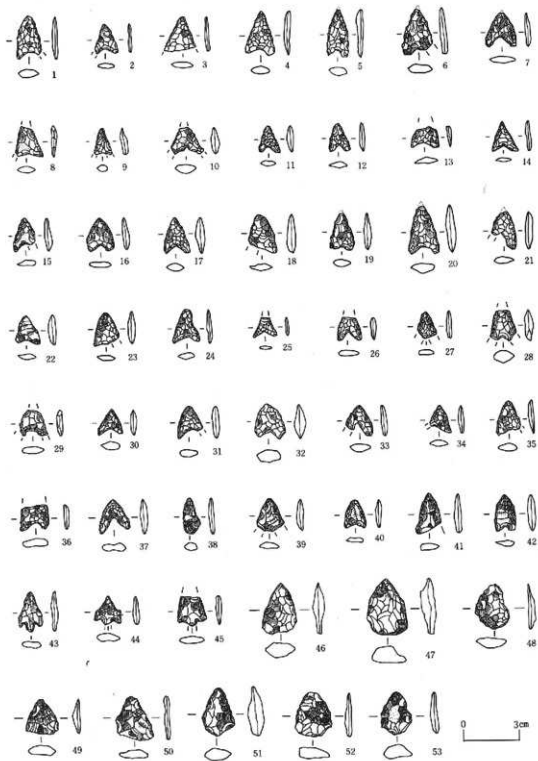
第73圖 遼東外出土器尖刺圖 (1:3)



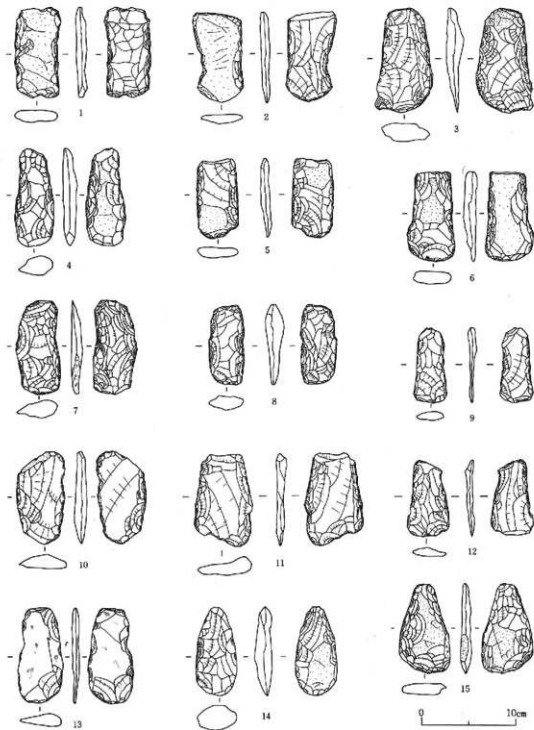
第74图 遼構外出土土器实测图(1:3)



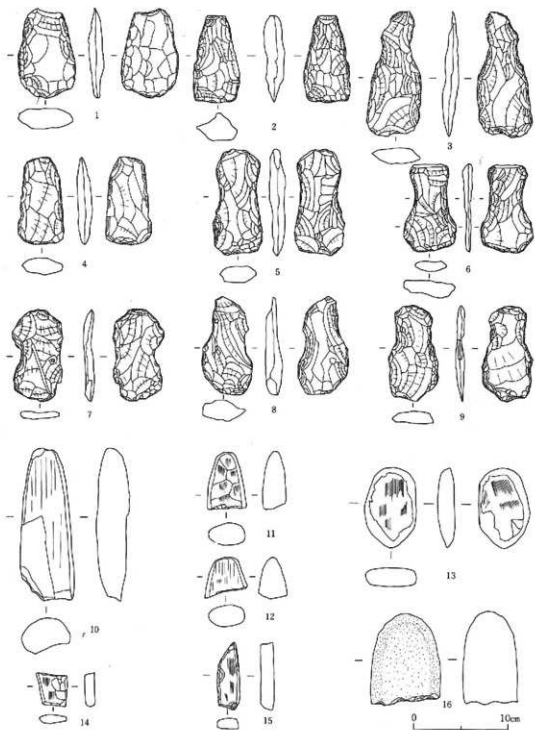
第75图 遺構外出土石器尖測図(1:2)



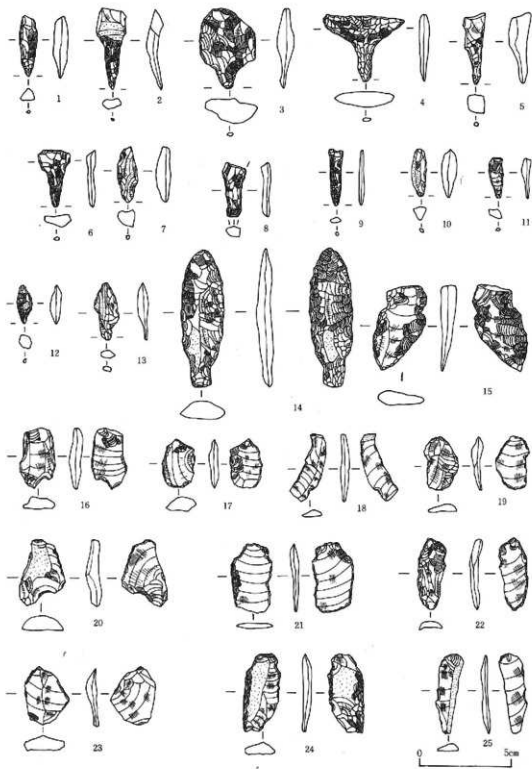
第76图 道溝外出土石器实例图 (1:2)



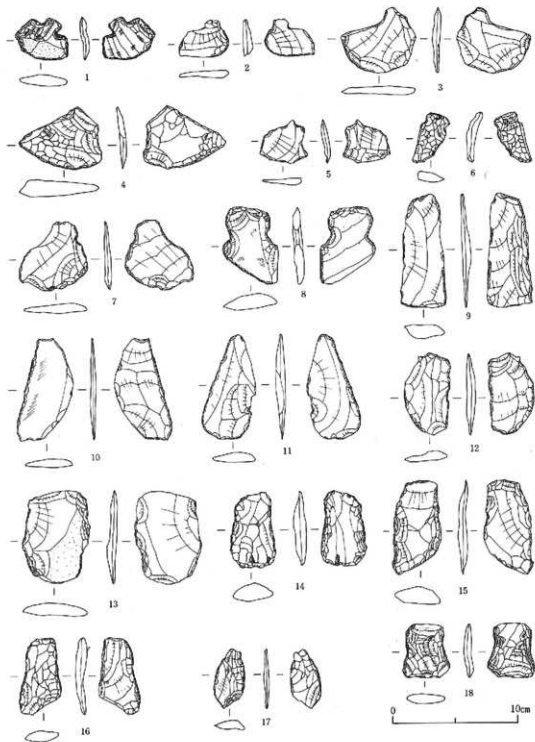
第77图 遗孺外出土石器实例图 (1:4)



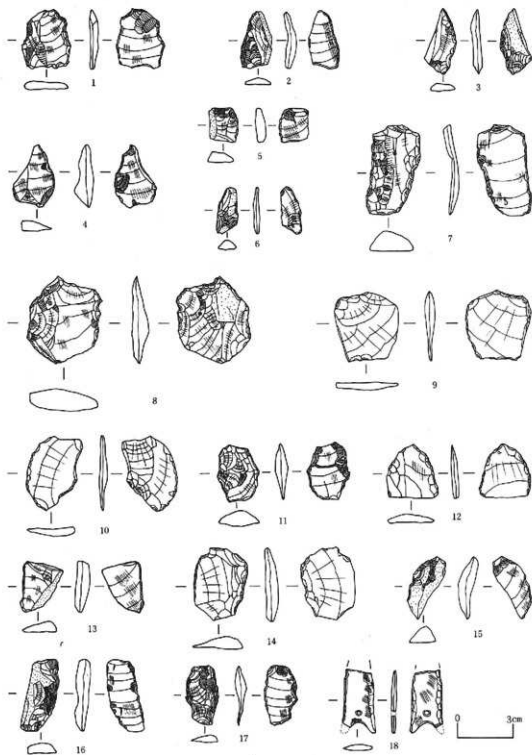
第78图 渣桥外出土石器实测图 (1:4)



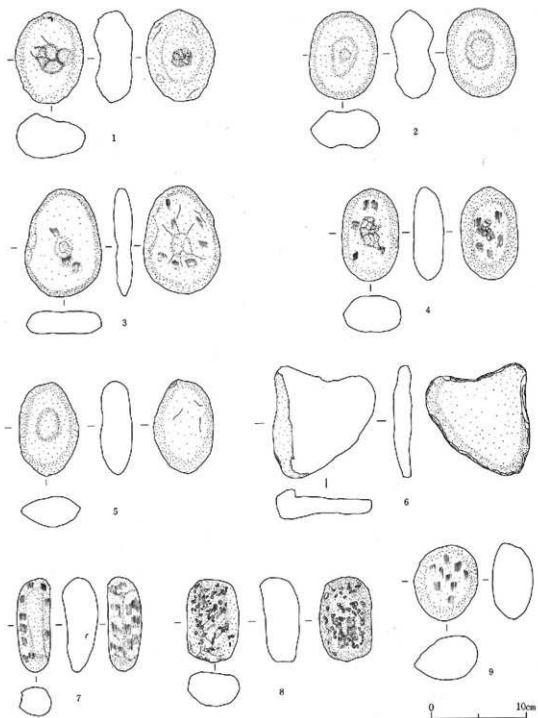
第79图 道桥外出土石器实测图(1:2)



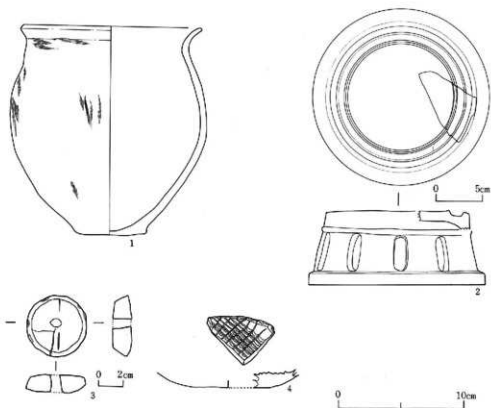
第80图 道模外出土石器实测图 (1:3)



第81图 遼陽外出土石器实例图 (1:2)



第82图 遗槽外出土石器尖测图(1:4)



第83図 遺構外出土遺物実測図(1:3)

れたが、全般に良好な資料の方が多かった。大きさや形態に比較的バラエティーがあり、機能・用途とも関連しているものと思われる。中でも3と4は刃部の長さに極端な相違があり、明らかに使用する対象物の違いを現わしているものと考えられる。

第79図14・15、第80図1～8は石匙である。14・15は黒曜石製である。14・15及び第80図6・8は縦型の形態をもつものであり、14・15は特に丁寧に製作されている。その他は横型の形態をもっているものである。

第79図16～25、第80図9～13・17第81図1～4、6～16は、さまざまな形態が含まれ、加工痕のある石器であるが、中でもスクレイパーと認められるものが多数を占めている。第80図は安山岩や頁岩製、第82図は黒曜石製の資料である。

第81図5・17は両極石器である。全体ではさらに出土している。両端に打撃を加えたものに、さらに両サイドに加工を行なったものが多く、それらの資料はスクレイパーの分類に入れた。

第82図1～5は凹石である。出土数は25点で周辺の遺跡調査例からみるとかなり量が少ない。

長さ10cmから12cm前後が平均的な大きさで、比較的扁平に近い楕円礫を使用し凹を作っている。両面に凹のあるものが多く、片面だけというのはまれである。石材は、安山岩が最も多く硬質砂岩も利用している。

第82図6は石皿で、大きく欠損しており一部分が出土したのみである。石質は、多孔質の安山岩である。表面は磨耗しており、かなり使用したものと思われる。

第82図7～9は、いわゆる磨石であるが、8は敲石としても機能しており、先端に剝離が目立つ。それぞれ扁平な河原礫を利用し、全体に研磨がなされている。用途は不明である。

第3節 古墳時代の遺物

出土した古墳時代の遺物は、須恵器の坏と甕の破片である。坏は小片が3片出土しており、口縁部の立ち上がりか2.2cmでやや外反さみである。口唇には段が付けられており、恐らく一周しているものと考えられる。胎土は、小石がふくまれているが良好で、青灰色をしており焼成は良好である。甕は、外面はナデ整形で、内面はタタキによる青海波文がみられる。器厚は0.8cmで、自然釉をかぶっているが焼成良好の土器である。

第4節 奈良・平安時代の遺物

奈良時代の遺物は、へうおこし底のみられる須恵器坏の小片1片のみである。平安時代の遺物は、土師器内面黒色の坏、同変形土器、須恵器坏、同変形土器、同長頸壺、灰釉陶器、紡錘車、円面硯がある。土師器変形土器(第83図1)は、口縁部直径25cm、高さ30cm、底径10cmを測る完形品で単独出土した。器面は削りとナデによる整形が行なわれ、赤茶褐色を示し焼成良好の資料である。長頸壺は底部の破片のみが出土した。かなり厚手で高台が付いている。紡錘車(第83図3)は、上部の直径4.1cm、下部の直径4.9cm、中央部の孔の直径0.9cm、厚さ0.7cmを測る。裏面の一部が僅かに剝離しているだけで、その他は完形である。円面硯(第83図2)は、僅かな部分が出土しただけであり、器形は復元図にすぎないが当町からは初めての出土である。

第5節 中世・近世の遺物

中世・近世の遺物には、山茶壺、播鉢、内耳土器、その他にいわゆる鉢、皿などの破片が出土しており、陶磁器からみると青磁、黄瀬戸、鉄釉、染付、天目などがある。中でも山茶壺は当町で3例目の破片であり、製作手法の共通性が目を引くものである。この他の遺物として古銭が10点出土した。「祥符元寶」、「元豊通寶」、「皇宋元寶」、「開元通寶」、「熙寧元寶」などで「元豊通寶」が4枚で出土量が多い。

第IV章 総括

上吹上遺跡発掘調査における経過及び成果はすでに各章の中で記載してきたところであるが、それらを概括し、要点と若干の考察、そして今後の展望も含めて総括とするものである。

本遺跡の環境は、八丁地川左岸の河岸段丘上にあたり、沖積地でありいわゆる氾濫原であるため、礫と砂利の層が厚く堆積していた。従って生活地盤は、この礫を取り除くことによって確保する状況にあった。また、水脈の通過地点と思われ、調査対象地域のいかなる地点を掘り込んでも一定レベルに達すれば水が上がりくる状況で、礫及び砂利層が主体となる地籍でありながら湿気の強い様相にあった。住居址等の遺構は、この層を掘り込んで構築し生活が営まれていた。しかし、その後水田の造成等の開発事業が行なわれ、しかも耕作と相まって遺構にまで手が届き、多くはその時に破壊されたものと考えられる。発掘調査によって検出された遺構は、これらの状況が経過した結果であることを踏えておきたいと考える。

検出した遺構は、縄文時代中期住居址7棟、ピット及び土壇125基、集石11基であり、出土した遺物は、縄文時代早期から現代の資料まで各時期さまざまなものが出土した。住居址は、中期初頭の五領が台式期（梨久保式・九兵衛尾根式併行期）2棟（4住・7住）、中期前葉の落沢式期（落沢式・阿玉台式併行期）1棟（6住）、中期後葉Ⅲ期の加曾利EⅢ式期（曾利Ⅲ・Ⅳ式併行期）2棟（2住・3住）、中期後葉Ⅳ期の曾利V式期（加曾利EⅣ式併行期）1棟（1住）が検出された。梨久保式・九兵衛尾根式併行期の住居址は、蓼科山北麓地域においては春日の後沖遺跡7住・18住の2棟に次いで検出であり、合計4例目ということになる。住居址形態は、円形ないし楕円形であり、規模は、上吹上遺跡4住を除けば直径300～400cmと小型であり、中央部に小規模な埋燵ないし石囲炉が存在する。また、立地条件にもよるが堅度が深いことも特徴である。それぞれの時期については、大区分からみると併行関係とみることができ、若干の型式差が認められ、しかも文化系統に違いがある。後沖遺跡7住は九兵衛尾根Ⅰ～Ⅱ式期、同18住は九兵衛尾根Ⅱ式期、上吹上遺跡5住・7住は五領が台式期といえるが、上吹上遺跡5住・7住の土器は、器形や文様の要素の中に九兵衛尾根式土器や梨久保式土器の特徴をも兼ねそなえている。この土器の類例は、同町春日の竹之城原遺跡や茅野市高風呂遺跡18住出土土器がある。尚、千曲川水系においては長門町の片羽遺跡にあり、報告（岩佐1976）では「梨久保式の特徴を備えた土器」とあるが、多くは五領が台式に近い土器が出土しているが、その他の地域ではあまり類例が求められないものである。

落沢式・阿玉台式併行期の住居址は、後沖遺跡6住・19住・21住・27住・28住と上吹上遺跡の6住の6棟であり、他に後沖SK78も併行期の遺構である。住居址の形態は、円形、楕円形、丸味のある長方形などバラエティーがあり、規模も直径350～600cm弱とこれも差が大きい。炉址も地床炉、埋燵炉、小規模な石囲炉などやはりバラエティーがある。これらのバラツキも、住居址

の形態と土器分析の詳細な関係を捉えれば、恐らくそれぞれのパターンのバラエティーとしてではなく、土器の細別された型式内の段階に応じ、ある程度定型化された文化の諸段階として把握ができるものと思っている。上吹上遺跡6住で重要なことは、二つの埋甕炉のうち一方は中部高地的な独自性の強いもので、次期新道式文化の萌芽のきざしが漂っている土器であることと、もう一方の土器は、阿玉台式の後半期という感はあるが、関東的色彩が強いもので、両者が同一住居址内で出土していることである。蓼科山北麓は、「文化のうずくまり地域」と考えている。縄文文化においては、関東、東北、北陸、東海、関西など各方面からの文化の流入があり、さらに近隣地域をみても、八ヶ岳南麓・南西麓、諏訪湖盆地、伊那谷、松本平などからも強い影響を受け、それぞれの地域そのままの文化形態を伝え、さらには影響を受けつつも本地域独特の文化を作り出している。そして、これらの伝播した文化、作り上げた文化は、他地域へ影響を与えることはほとんどなく当地域でうずくまっている感がある。それは、千曲川水系を例にとっても、町中で検出された住居址や出土遺物の類別が求められないこと、また、他地域との比較の中で併行する文化の所産をみても、どこかが異なっているといった類別が極めて多い。これらの内容については、さらに詳細な分析の中で把握しなければならぬが、蓼科山北麓地域の文化は、受け入れたものがなぜか定着して動かない要因があったものと思われる。

曾利Ⅲ～Ⅳ式・加曾利EⅢ式併行期の住居址は、平石遺跡6住・7住・8住・9住・10住・11住・12住・13住・17住・18住・29住・30住、胡桃沢遺跡3住と上吹上遺跡2住・3住の15棟である。円形の竪穴で直径300～500cmを測り、規模に差がみられる。住居址の構造はしっかりしており、周溝が用けられたり、床面はタキが行なわれて極めて固くなっているものが多い。また、炉址は方形の石囲炉が作られ、深くそして規模が大きいのも特徴である。上吹上遺跡2住の土器は、唐草文系が主体であり、いわゆる曾利式系統に属するものである。また、3住は、縄文系の加曾利E式系統の土器である。両者の住居址の時期は、3住の方が古く位置づくものと思われる。縄文中期後半は、関東や県内中南信地方の影響を非常に強く受けており、当地域でも遺構の数が最も多く、出土遺物の量も当然多い。しかし、土器など一部分において独自性のあるものを作り出しており、長期定着性の強い文化であったとみることができる。

上吹上遺跡の縄文時代の様相は、遺物だけからみると早期の撚糸文、押型文、貝殻腹縁文、貝殻条痕文、無文の各土器から始まり、前期の羽状縄文、斜縄文、突き刺し文土器、中期の五領が台式（梨久保・九兵衛尾根式併行期）、貉沢式併行期、加曾利E系、唐草文系土器、後期の浦谷BⅠ～Ⅴ式土器など各期の土器が存在し、この時期に少なくとも上吹上遺跡において人々の動きのあったことが明らかになったわけである。

検出された土壌は、全体の様相や出土遺物から縄文時代に構築されたことは間違いなく、しかも住居址の存在時期であろう。性格については不明であるが、検出状態から住居址と一体となる施設ではないかと考えられる。

集石は合計11基検出されており、土壌の存在とその上部への集石という構築状態は、11基とも

共通するところである。しかし、土壌内部からは主体となる遺物が全く出土していないため、時期や性格を判断する手掛りは得ることができなかった。但し、集石群中より五輪塔の風輪が二個出土したり古銭が出土しており、また、集石群から県道を挟んだ北側には、少なくとも近世から続く墓地が存在していることを考えれば、この墓地から集石群までは墓域であり、集石そのものは近世の墓であった可能性がある。しかし、状況判断だけであり決定づける資料がないので推測というだけに止めておく。

古墳時代の資料は、坏の破片が数片だけであり、遺構の検出をすることはできなかった。本地域の西方60mの大谷地域籍には、山ノ神古墳群が存在し、現在煙滅したものを含めて4基が確認されている。いずれも六世紀後半のもので、石室規模も大きく、昭和45年度と平成元年度の発掘調査により、直刀、刀子、鉄鎌、甕、馬具（金鈴、辻金具、杏葉、雲珠、罌など）、帯金具、曲玉、管玉、切子玉、丸玉、ガラス小玉などこの時期の古墳としては一基からの出土量が県内一を数える程出土している。これら被葬者の生前の生活地は、古墳時代の住居址が古墳の存在する周辺地域では検出されていないところから不明と言わざるを得ないが、平石遺跡や上吹上遺跡からは、極めて少量ではあるが遺物の出土していることをみれば、周辺地域に集落址が存在していた可能性も考えられる。当地域の古代史解明の上でも重要な課題であり、また、急務を要する問題でもある。

奈良・平安時代の資料は、これも遺構の検出はなく少量の遺物が出土しただけであった。特に平安時代の遺跡は当町においては最も多く、また、各地域くまなく分布している。完形の土師器甕型土器が出土していることをみれば、上吹上遺跡に住居址（集落址）のあった可能性が高い。中世・近世においても陶磁器や古銭など、生活に密着した資料が出土しており、当地域の歴史的解明に貴重な資料が提示されたことになった。

以上、概要を記載したが、考察を加えたい部分はさらにある。これから報告をまとめるもの、調査を実施するものがあり、これらの内容も合わせ総合的に把握したいと考えている。

参考文献

- 富沢恒雄 1976『長野県地質図・長野県の地質』信濃教育会出版部
森嶋 稔 福島邦男 1978『下吹上』長野県考古学会研究報告書11
宮坂虎次 中林龍雄 若佐今朝人他 1976『片羽遺跡』長門町教育委員会
宮坂光昭 武藤雄六他 1978『管利一第三・四・五次発掘調査報告書』富士見町教育委員会
福島邦男 1983『後沖遺跡緊急発掘調査報告書』望月町教育委員会
福島邦男 1984『竹之城原 浄水坊 浦谷B遺跡緊急発掘調査報告書』望月町教育委員会
戸沢充則他 1986『梨久保遺跡第5次～第11次発掘調査報告書』岡谷市教育委員会
宮坂光昭 鶴岡幸雄他 1986『高風呂遺跡緊急発掘調査報告書』茅野市教育委員会
福島邦男 1989『平石遺跡緊急発掘調査報告書』望月町教育委員会

版 圖



1. 第1地点全景



2. 第2地点全景



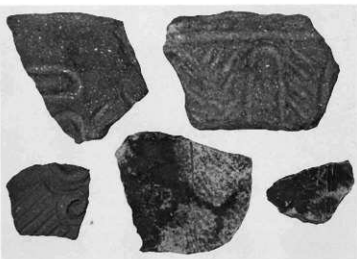
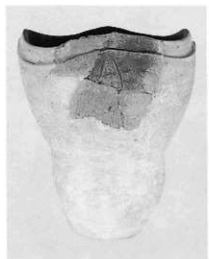
1. 第3地点全景



2. 第1号住居址



1. 第1号住居址炉址



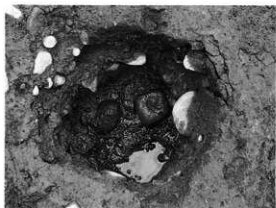
2. 第1号住居址出土土器



1. 第2号住居址



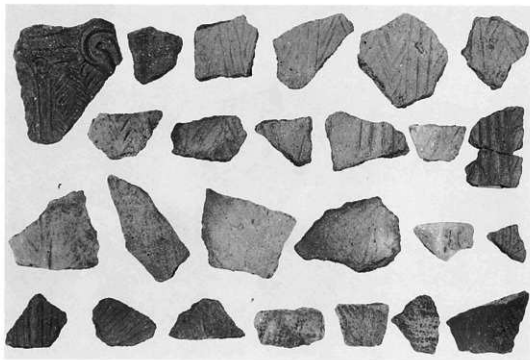
2. 第2号住居址炉址



3. 第2号住居址柱穴



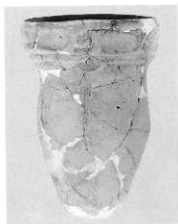
4. 第2号住居址柱穴



5. 第2号住居址出土土器



1. 第3号住居址



2. 第3号住居址出土土器



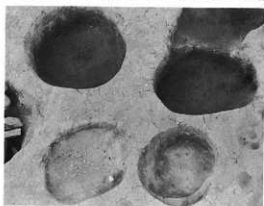
3. 第3号住居址炉址



4. 第3号住居址土器出土状态



5. 第4号住居址



1. 第4号住居址柱穴及び土壤



1. 第4号住居址
出土土器



2. 第4号住居址
出土土器



3. 第5号住居址



4. 第5号住居址土壤



5. 第5号住居址土壤



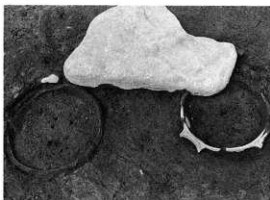
6. 第5号住居址土壤



7. 第5号住居址出土土器



1. 第6·7号住居址



2. 第6号住居址埋奠炉



3. 第6号住居址立石出土状态



4. 第6号住居址埋奠炉



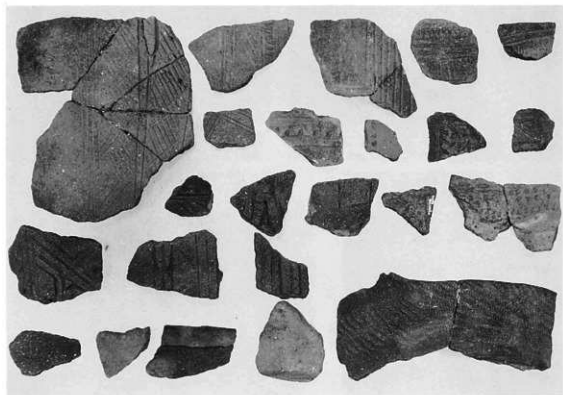
5. 第6号住居址埋奠甕



1. 第7号住居址



2. 第7号住居址炉址



3. 第7号住居址出土土器



1. 土坑群



1. 集石群



2. 第1号集石



3. 第2号集石



4. 第3号集石



5. 第4号集石



1. 第5号集石



2. 第6号集石



3. 第7号集石



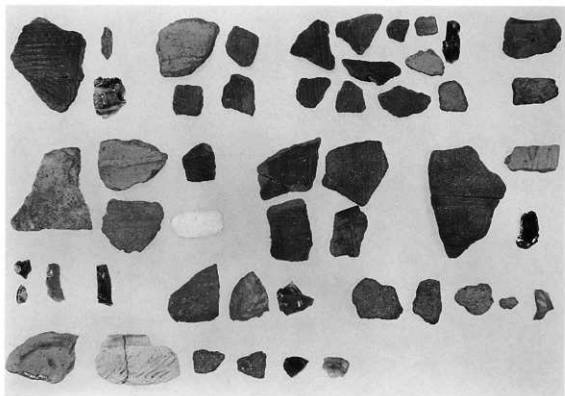
4. 第8号集石



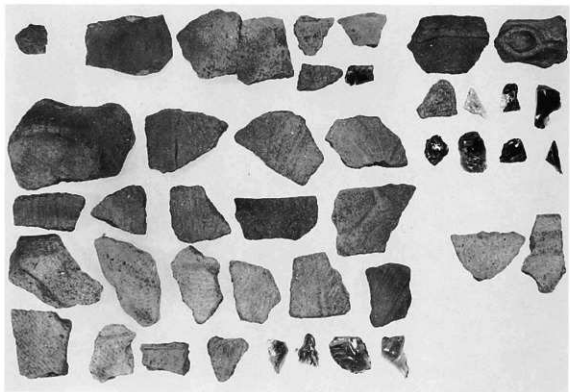
5. 第9号(右)、第10号(左)集石



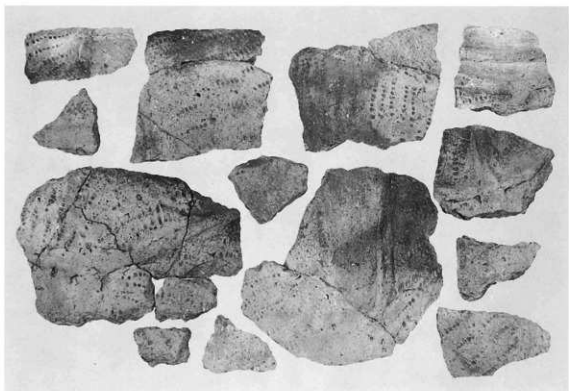
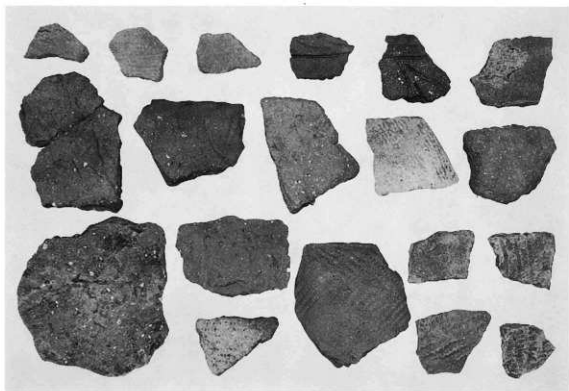
6. 第11号集石



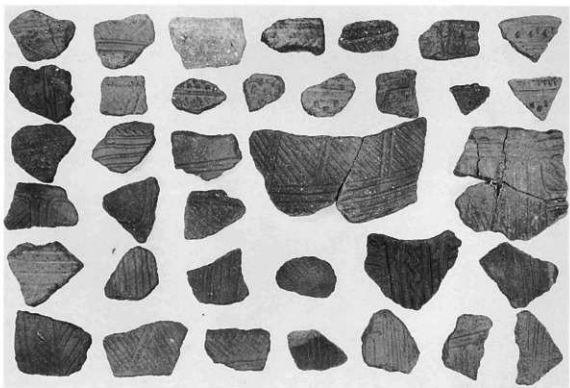
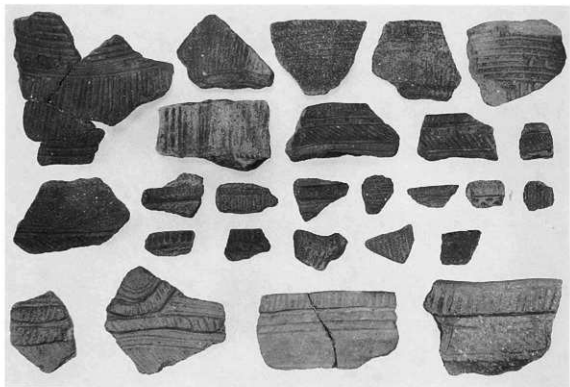
1. 集石出土遺物



2. 集石出土遺物



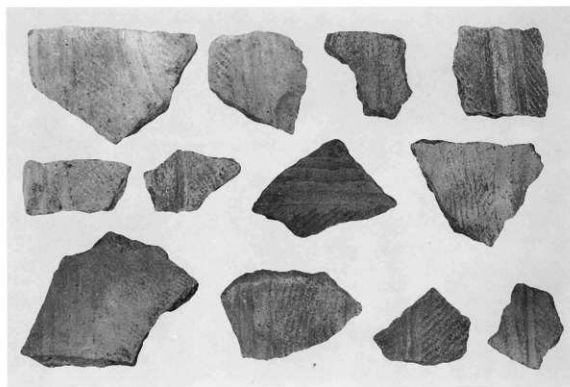
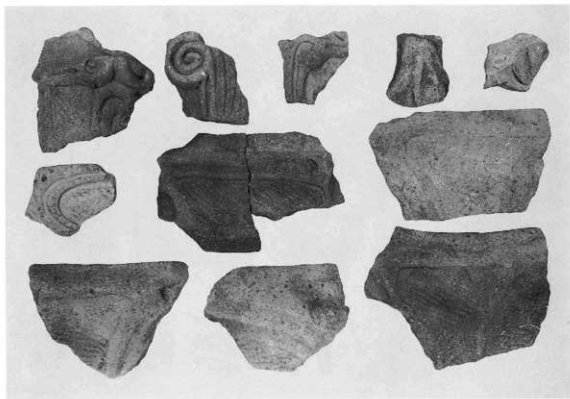
1. 濠橋外出土遺物



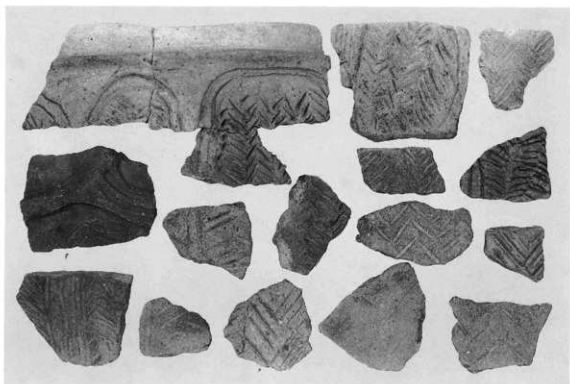
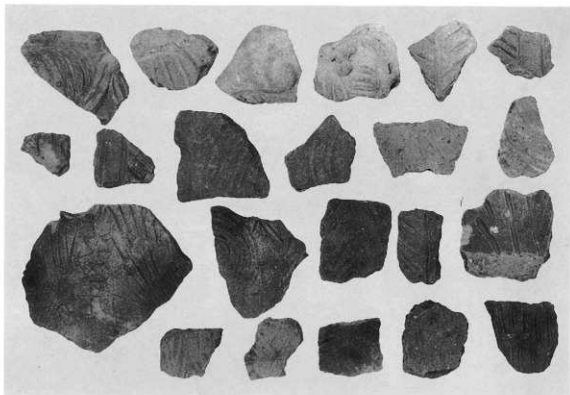
1. 遺構外出土遺物



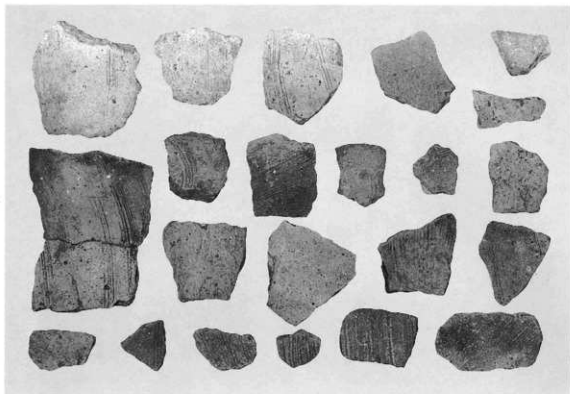
1. 道橋外出土遺物



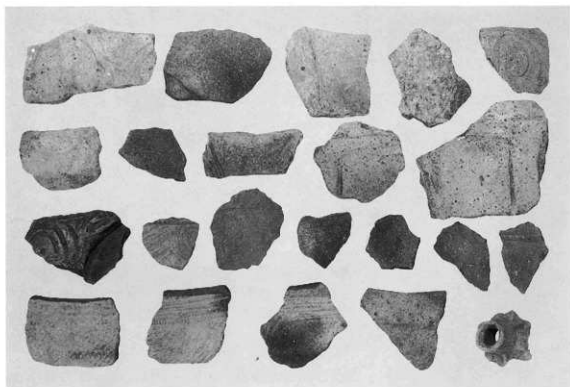
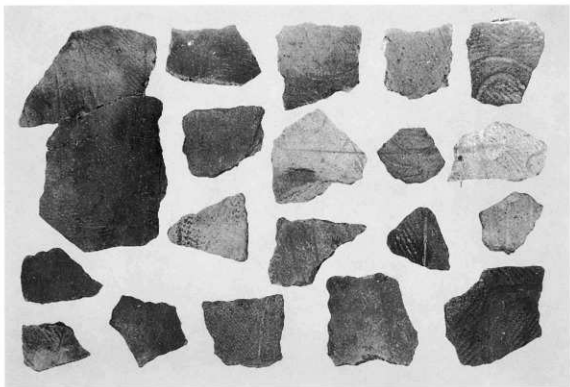
1. 遺構外出土遺物



1. 這橋外出土遺物



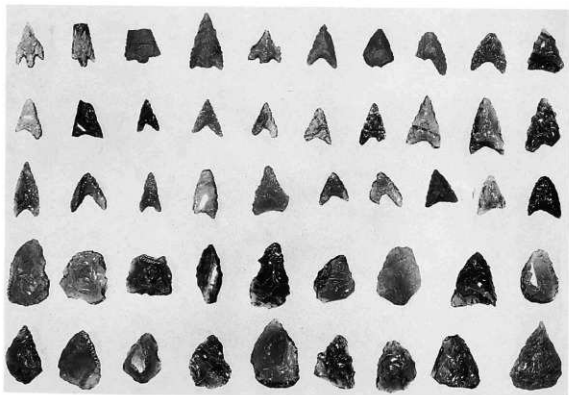
1. 遺構外出土遺物



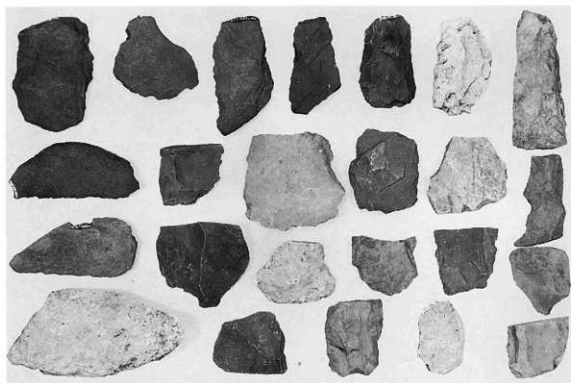
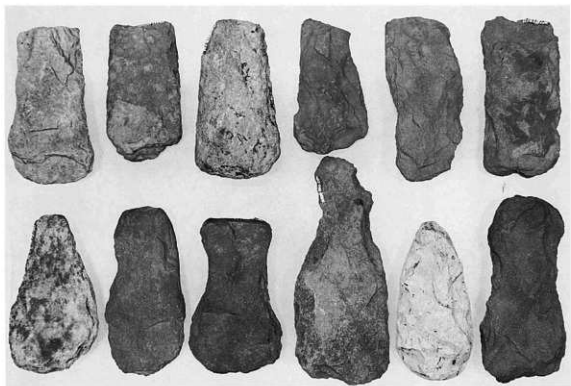
1. 遺構外出土遺物



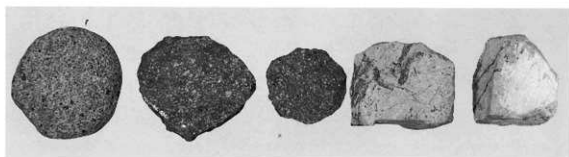
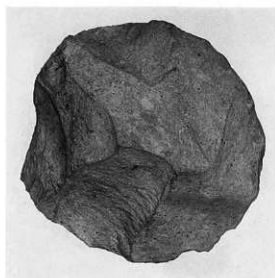
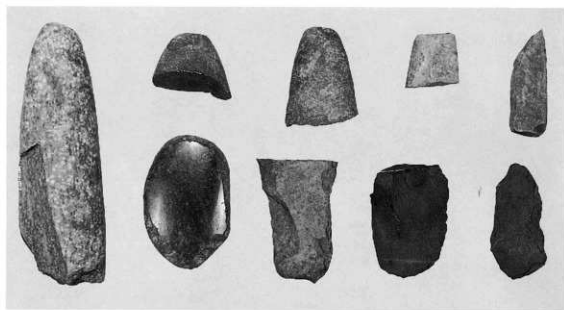
1. 遺構に伴う遺物



1. 遺構外出土遺物



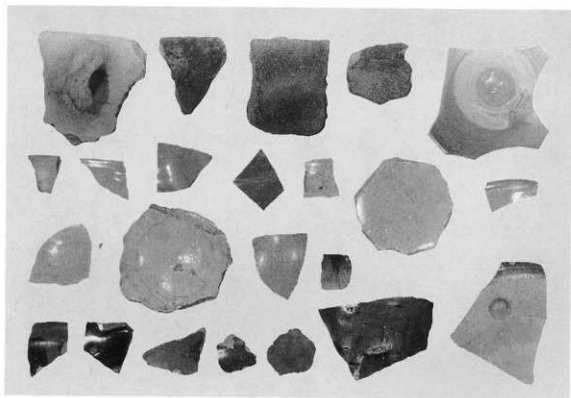
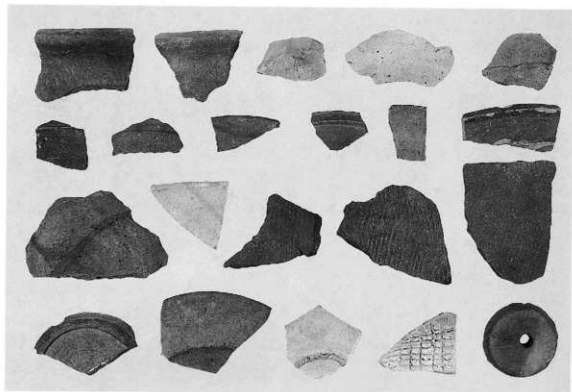
1. 遺構外出土遺物



1. 遺構外出土遺物



1. 道橋外出土遺物



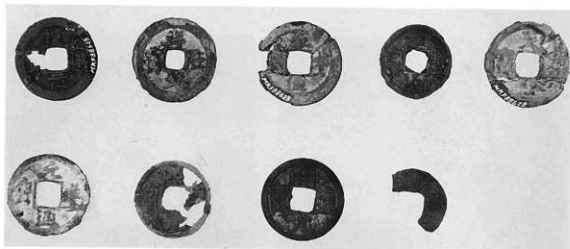
1. 道溝外出土遺物



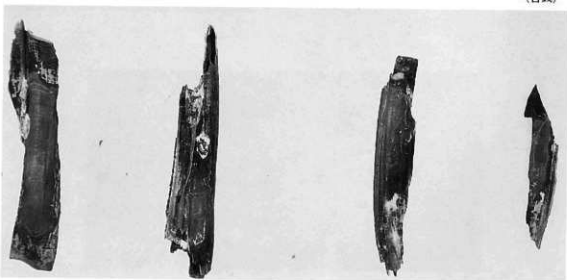
(土師器甕)



(円面碗)



(古銭)



(馬齒)

1. 遺構外出土遺物



1. 遺物出土狀態



1. 調査前の様子



2. 金井神官による神事



3. あいさつする佐藤町長



4. 佐藤町長による鍬入れ



5. 基盤整備事業委員長(佐藤栄一氏)による鍬入れ



6. 田中教育長による鍬入れ



1. 調査及び整理風景

- 望月町文化財調査報告書 第1集 「下吹上遺跡」(昭和53年度)
- 第2集 「犬飼遺跡第1次緊急発掘調査報告書」(昭和53年度)
- 第3集 「犬飼遺跡第2次緊急発掘調査報告書」(昭和53年度)
- 第4集 「又久保遺跡緊急発掘調査報告書」(昭和55年度)
- 第5集 「望月町遺跡詳細分布調査報告書」(昭和55年度)
- 第6集 「尾崎第4号古墳、大塚第1号・2号古墳緊急発掘調査報告書」(昭和55年度)
- 第7集 「新水A・B遺跡」(昭和55年度)
- 第8集 「金塚遺跡緊急発掘調査報告書」(昭和56年度)
- 第9集 「真光寺第1号古墳緊急発掘調査報告書」(昭和57年度)
- 第10集 「春日尾崎遺跡緊急発掘調査報告書」(昭和57年度)
- 第11集 「後沖遺跡緊急発掘調査報告書」(昭和57年度)
- 第12集 「橋久保A遺跡緊急発掘調査報告書」(昭和57年度)
- 第13集 「竹之城原遺跡 浄永坊遺跡 浦谷B遺跡緊急発掘調査報告書」(昭和58年度)
- 第14集 「胡桃沢 瓜生坂A 宮久保A 布施山寺A 岩井遺跡緊急発掘調査報告書」(昭和58年度)
- 第15集 「望月城跡緊急発掘調査報告書」(昭和59年度)
- 第16集 「岩清水遺跡緊急発掘調査報告書」(昭和60年度)
- 第17集 「平石遺跡緊急発掘調査報告書」(昭和63年度)
- 第18集 「上吹上遺跡緊急発掘調査報告書」(平成元年度)

望月町文化財調査報告書 第18集

上 吹 上 遺 跡

—緊急発掘調査報告書—

発行日 1990年3月31日
編集者 望月町教育委員会
発行者 望 月 町
望月町教育委員会
印刷 ほおずき書籍株式会社
